



〈JMMA第15回記念大会〉

目 次

【特 集】

〈会員研究発表〉

東京都江戸東京博物館 谷川真実子	2
国立民族学博物館 五月女賢司	3
千葉県博物館協会地域振興委員会委員・千葉県立中央博物館 教育普及課長 新 和宏	8
文化庁文化財部美術学芸課長 栗原 祐司	10
(独)国立科学博物館 亀井 修・小川 義和・永山 俊介・渡辺 千秋／ 静岡科学館 高橋みどり／元(独)国立科学博物館 水野麻衣子	13
慶應義塾大学大学院後期博士課程 本間 浩一	15
文部科学省科学技術政策研究所 牧 慎一郎	17
(財)日本科学技術振興財団・科学技術館 中村 隆・小林 成稔・鈴木まどか・田代 英俊	19
総合研究大学院大学 奥本 素子／東京藝術大学 嘉村 哲郎／共栄大学 平井 宏典	21
常磐大学院人間科学研究科博士課程後期 邱 君妮	22
神戸学院大学経済学部教授・フィランソロピー研究フォーラム神戸学院大学代表 高島 博	25
政策研究大学院大学政策研究科・日本学術振興会特別研究員(DC2)・東京大学総合研究博物館研究事業協力者 寺田 鮎美	26
京都大学総合博物館・京都大学研究師源アーカイブ 山下 俊介／アクティブKEI 伊藤 恵	29
常磐大学大学院コミュニティ振興学研究科 大松 美香	32
山梨大学大学院博士課程 矢崎 陽子	35
阿蘇火山博物館 吉川美由紀・池辺伸一郎・須藤 靖明・溝口 千花／京都大学大学院 鍵山 恒臣／ 阿蘇市教育委員会 宮本 利邦／南阿蘇村教育委員会 山村 隆文	37

【論考・提言・実践報告】

一枚のクイズカードから広がる博物館の普及教育

NPO法人大阪自然史センター 五月女草子／大阪市立自然史博物館 釋 知恵子・佐久間大輔	40
---	----

【新刊紹介】

『新博物館学 これからの博物館経営』 桃山学院大学 井上 敏	47
--------------------------------	----

【インフォメーション】	48
-------------	----

特 集

去る6月5日(土)・6日(日)に開催いたしましたJMMA第15回記念大会「ミュージアム・リテラシー—地域との連携—」を前号と今号の2回にわたり特集して報告します。

会 員 研 究 発 表

公立現代美術館の交流・創造機能 —地方都市における 設立経緯・活動の考察から—

東京都江戸東京博物館
谷川真実子

「芸術は都市の限られた人々にしか享受できないものか」。多くの地方が抱えるこの問題に対し、近年、地方における現代美術館の活動が注目されているが、未だその必要性や活動への疑問や批判にさらされている。一方、これまでの研究においても公立現代美術館の今日的な役割や機能は具体的に示されていない。そこで、本研究では、地方都市における公立現代美術館が地域社会に対して、多様な価値観や新たなコミュニケーションを創出するといった交流・創造機能を果たす一つの重要な存在であることを明らかにすることによって、活動への理解の一助となると共に、公立現代美術館の存在意義と必要性の根拠の一例を示すことを試みた。研究対象は来館者と直接関わる「展示」や「教育」において重要な活動を実施している地方都市の市立現代美術館：水戸芸術館現代美術センター、熊本市現代美術館、金沢21世紀美術館、十和田市現代美術館の4館とし、文献資料や各美術館関係者へのインタビューをもとに設立経緯、展覧会活動、普及活動、美術館活動総体の地域社会への広がりや整理し、地域社会において各館と来館者がどのような関わりを形成しているかという視点から分類、比較、考察を行った。

設立経緯から、4館については次の3つの共通点を見出した。①日常生活の中で市民に現代美術とふれる機会をもたらす、市民の感性を刺激する場所、②地域社会に「現在」と「世界」を示し、地域社会の新たな文化と未来を創造する拠点、③市民が集まり、新たな交流を形成していく場所。また、4館の理念や建物から来館者とのよりフラットな関係の構築を目指していることがうかがえ、開館前の「プレ・イベント」の実施によって市民との関係作りを積極的に行う様子を確認した。以上から、いずれ

の館も「地域社会の文化的な活動拠点」として位置づけられ、さらに、来館者に美術館での体験を通して「自己実現」や「創造志向」をもたらすことを目指す新しい時代の美術館として位置づけられることが明らかとなった。

次に、開館から2009年までに各館が実施した展覧会活動を2つの視点：「作家・作品」、「展覧会の形態」にて整理した結果、5つの特徴：①新規性、②多様性、③現代性、④地域性、⑤外部性を確認した。また、美術館関係者へのインタビューから公立現代美術館が2つのベクトル：「世界の現代美術に向かっていくベクトル」、「活動の拠点となる地域的なベクトル」に位置づけられることを確認し、前述の5つの特徴が2つのベクトルに位置づけられることを示した。以上から、展覧会活動が、現代美術やその作家との「出会い」と「交流」、新しい展覧会の形式・他分野による新たな表現・作家の活動の場所・地域資産の「創造」といった機会と可能性を生み、出会い、交流、創造をもたらす場として機能していることが明らかとなった。また、4館で実施されている普及活動を財団法人地域創造が示した普及活動の8つのタイプに分類した結果、3つの主だった傾向：「定着型（美術館の基本事業として定着がみられる活動）」、「理念・特性対応型（美術館の理念や対象・土地の特性に応じて実施している活動）」、「実験型（一部の館で実施されている実験的な試み）」が明らかとなった。さらに、ボランティア活動についても普及活動として考察を行った結果、活動の動機は個人的な興味関心であったボランティアが「現代」に生きる人や現代社会そのものに目を向け、ボランティア・美術館双方にとって社会に視野を広げる機会をもたらすことを確認した。以上から、普及活動は、来館者・作家・作品・現代美術館の相互の交流を図り、個性・社会への関心・新たな価値観等を生み出し、現代美術館に新たな可能性や展開をもたらす機会となっていることが明らかとなった。

続いて、地域社会へ展開する活動として近年見られる美術館外を会場とする展覧会を考察し、同展覧会が第1段階：地域社会での作品展示、第2段階：地域社会に入り込んでいく活動、第3段階：市民を巻き込み、地域社会側の主体を生み出していく活動という3つの段階を経ており、近年は第3段階の要素が強くなっていることから4館が現代美術は美術

館のみで展開されるものではないことを示唆している点に共通点を見出した。一方、関係者へのインタビューから美術館外の展覧会は美術館に方法論がなく、多大な労力を要するにも関わらず、活動の継続性や効果が見られないという問題点が明らかになった。以上の問題点を抱えながらも、美術館外の展覧会はこれまで美術館に縁のなかった人と関わり、地域社会に新たな発見や自発的な活動への発展を促し、地域社会をインボルブする（巻き込む）ことによってより深い関わりをもたらし新たな交流・創造機能であることが明らかになった。さらに、美術館活動総体の地域社会への広がりを整理し、公立現代美術館と地域社会の関わりを①美術館発信型、②美術館発、地域連携型、③地域発、美術館連携型、④地域自発型と分類した。その結果、公立現代美術館の活動が地域社会に働きかけ、様々な属性を持つ人との新たな関わりを生み出し、新しい刺激を創出しながら多様な価値観を認識し、互いに変化をもたらし機会を生み出すコミュニケーションを可能とする交流機能と、多様性を担保しながら新たな刺激や価値観を生み出す創造機能を果たし、地域社会に新たな活動の主体が創出され、地域社会の刺激、多様性が高まることを示した。

一方、財団法人地域創造の資料をもとに現代美術館を「公立・私立」、「地方・都市」という視点から整理・比較するとともに、文献やインタビューから美術館関係者が捉える地方都市の特性、現代美術や現代美術館の役割を整理し、地方都市の公立現代美術館が地域社会を拠点とし、活動に地域社会をインボルブする（巻き込む）特徴があることを示した。

以上の考察から、地方都市の公立現代美術館は、地方都市に異質なものの理解、変化や新しい活動を生み出す機会をもたらし、価値観や選択肢の多様性を担保しながら新たな繋がりや展開を生み出す「地域社会の文化的な活動拠点」として地域社会における交流・創造機能を果たす存在であり、この点こそが公立現代美術館の今日的な役割や機能であるといえる。さらに、結論として次の3点に言及する。①現時点では本研究の示す機能は全ての公立現代美術館に当てはまるものではないが、目標とすべきものであり、地域社会における交流・創造機能が担保され、機能することによって地域社会の発展や活性化が図られていく。②設置者は公立美術館の役割を強く意識し、運営側とも共有しながら地域社会に示す必要がある。③公立美術館の理念のもとに活動を展開できる運営方法について、設置者・運営者が議論

し、前例踏襲ではなく、柔軟に適切な方法を生み出し、実行することが必要不可欠である。本研究の今後の展開として、これらの機能を活かす地方都市の公立美術館の運営方法の検討、美術館の本質的な機能を踏まえたまちづくりや都市計画の実施が示されることを期待する。

博物館職員のミュージアム・リテラシー向上のための取り組み —国立民族学博物館における 展示活動研修会の事例から—

国立民族学博物館
五月女賢司

1. はじめに

国立民族学博物館（以下、「民博」とする）では、干支に関する年末年始展示イベントの展示計画に組み込む形で、2004年度から毎年度、事務職員を中心とした館内職員対象の展示活動研修会を実施している。日本国内では、大学における学芸員養成やリカレント教育、複数館の現職学芸員に対する国レベル、都道府県レベル等の専門研修会などの例はあるが、単独館による事務職員を中心とした館内職員への展示活動研修会は例がないのではなかろうか。本稿では、民博の館内職員対象の展示活動研修会に関する取り組みの事例とアンケート集計結果をふまえ、本研修会のこれまでのあり方を再検討するとともに、今後のあり方を考察したい。

2. 展示活動研修会の背景と概要

民博は、国立大学法人法の規定により設立される大学共同利用機関法人である。つまり、民博の教職員は、大学に準じた研究機関の職員としての意識を持つ者が多く、博物館活動についての意識は希薄な傾向にある。そこで、職員のミュージアム・リテラシー向上のため、2004年度より民博の小林繁樹教授主導のもと、年末年始展示イベントとセットで職員研修会プロジェクトが提案・実施されてきた。本研修会の目的は、普段展示活動に直接関わることのない事務職員を中心とする職員に展示の企画立案から標本資料や写真パネルの演示に至る幅広い内容の研修を行うことで、民博の展示活動を概観し自己およ

び相互の啓発の機会とすることにある。

本研修会は、館内の研究職員（以下、「教員」とする）や専門員に講師としての協力を依頼し、毎年度10名程度の受講生に対して行っている。講師陣の多くは、民博のこれまでの途上国博物館の学芸員らへの研修や、大学の非常勤講師、民博ボランティアへの研修などの研修実績を持っており、本研修会は過去の蓄積が生かされた形の運営となっている。2008年度と2009年度の研修会は、年末年始展示イベントとあわせて筆者が研修会プロジェクト・チームの実質的なリーダーとして実施した。開催時期は毎年11月から12月まで、1～2週間に1回のペースで、約



図2. 演示

表1. 2009年度の研修プログラム

① 1日目 (11月18日(水))

時間	研修内容	担当	場所	
15:30～15:35	説明	オリエンテーション	小林	本館1F 展示準備室
15:35～15:45	講義	展示作業の流れについて	野林	本館1F 展示準備室
15:45～15:55	講義	資料管理（資料の取扱いについて）	日高・飯島	本館1F 展示準備室
15:55～18:05	講義	標本資料データベースによる検索（展示イベント「とら」に利用するデータの検索）	恩地・山中	本館1F 展示準備室
18:05～17:00	講義/実習	収蔵庫見学および展示イベント「とら」に用いる展示資料の調査（確認）	野林・五月女・飯島	本館1F 展示準備室
解説パネル文作成は12月2日までの宿題とする。				
17:00	終了			

② 2日目相当分 (11月24日(火)～12月1日(火)の間の1時間15分)

時間	研 修 の 内 容		担 当	場 所
1時間15分	実 習	選定資料の写真撮影	田上・五月女	本館 3F 写場

③ 3日目 (12月2日(水))

時間	研修内容	担当	場所
15:30～15:40	講義/実習	展示レイアウト確認、チラシ案検討 小林・野林・五月女・ 飯島	本館4F 大演習室
15:40～16:00	講義	標本資料の保存と活用 園田・日高	本館4F 大演習室
16:00～16:30	実習	解説パネル文の校正 小林・野林・日高	本館4F 大演習室
16:30～17:00	講義/実習	民博の社会連携、展示イベント「とら」付 加事業等の企画について、チラシの決定 宇台谷・五月女	本館4F 大演習室
17:00	終了		

④ 4日目 (12月16日(水))

時間	研修の内容	担当	場所
13:30	集合		本館 3F 図書室近く エレベーターホール
13:30～14:00	見学 映像音響資料保管庫、映像音響資料の編集 作業及び静止画(写真)の整理作業の現場	中川・田上	本館 3F
14:00～15:00	実習/まとめ 演示実習、総括(全体を通しての意見交換、 反省、アンケート用紙配付など)	小林・野林・日高・ 五月女・飯島	本館 2F 旧新着資料 コーナー
15:00	終了		



図1. 選定資料の写真撮影

1時間半の研修会を4回行う。研修内容は、展示作業の流れ、資料管理、解説パネル文作成、選定資料の写真撮影、付加事業等の企画、演示などについて講義や実習の形で実施している。

3. これまでの展示活動研修会の変遷

本研修会は、民博が所蔵する翌年の干支にちなむ実物の標本資料を、本館1階エントランスホールにおいて展示するという展覧会計画の一部を受講生が担う形で、2004年度から2006年度まで実施されてきた。しかし、エントランスホールにおける温湿度の暴れが標本資料に悪影響を与える可能性が保存科学専門の教員から指摘されたため、2007年度と2008年度は標本資料を受講生が撮影し展示する写真パネル展に変更となっていた。しかし、写真パネル展に変更後、本研修会を運営する主要プロジェクト・メンバーから標本資料の展示の再開を望む声がたびたび聞かれるようになった。これは、標本資料を所蔵する博物館が展覧会を開催するのに、写真パネルを展示するだけでは不十分なのではないかという考えに基づくものである。このため、2009年度は標本資料に悪影響を与えにくい本館2階展示場内に会場を変更し、標本資料を展示する研修を再開した。しかし、一方で2年間の写真パネル展の実績も無視することはできず、結果的に2009年度の研修会は標本資料展

表2. これまでの研修会の変遷

年度	研修内容	場所
2004～2006年度	標本資料の展示	1階エントランスホール
2007～2008年度	写真パネルの展示	1階エントランスホール
2009年度	標本資料と写真パネルの展示	2階展示場内

示と写真パネル展示の両方を組み込む形に拡大させることとなった。

詳細は後述するが、このことは、結果的に研修会プロジェクト・メンバーのみならず、受講生の負担を増大させることにつながった。事前に対策を練り、できるだけ写真パネルの演示実習の時間を減らし、標本資料の演示実習に時間を費やすようにしたが、受講生の負担感の解消には必ずしも繋がらなかった。

このほか、2008年度から2009年度にかけての主な変更点を紹介する。

まず、2009年度からは写真撮影実習を少人数制とし、講師が2名ずつの受講生に対して十分な時間をとって研修をできるようにした。これは、2008年度においては写真撮影実習に割り当てられた1時間10分の研修時間があまりに短く、受講生10名のほとんどが撮影を終えることができなかったことを教訓としたことによる変更であった。

また、2008年度は付加事業のひとつであるワークショップにも、通常の4コマ以外の時間を使って希望する受講生にその運営手法などについての実地研修として企画参画させた。しかし、事務職員である受講生たちが勤務時間内に通常業務以外の用件に関して動くことは認められなかったため、昼休みや勤務時間終了後に集まって打合せ等をせざるを得なかった。このことは、結果的にワークショップ企画・運営の効率の悪さを招いたため、2009年度はワークショップに関する実地研修を実施しなかった。

4. アンケート調査の概要

研修会終了後は、毎年度受講生に対してのアンケート調査を実施している。ここでは、筆者が関わった過去2回（2008年度、2009年度）のアンケート集計結果から見てきた傾向を紹介する。なお、2008年度の受講生は10名、2009年度は14名（内1名はアンケート未提出）であった。また、同一人物による複数年度の研修会受講は認めていない。

アンケートの実施概要は以下の通りである。

〈2008年度〉

調査方法：記名アンケート（後日回収）

調査対象：2008年度の受講生

アンケート配付日：2008年12月17日

回答数：10名（内訳：事務職員10）

回収率：100%

〈2009年度〉

調査方法：記名アンケート（後日回収）

調査対象：2009年度の受講生

アンケート配付日：2009年12月16日

回答数：13名（内訳：事務職員12、教員1）

回収率：93%

5. 調査結果から見てきた傾向

傾向としては、全体的に2009年度より2008年度の結果の方が若干評価が高かった。

まず、「研修に参加して良かったと思いますか」と「この研修は必要と思いますか」との設問に、2008年度はそれぞれ100%（10名）の受講生が「良かった」、「必要」と回答した。一方、2009年度は、「良かった」が92%（12名）、「必要」が69%（9名）であり、それ以外の受講生は「どちらかといえば良かった」、「どちらかといえば必要」と回答した（図4と図5を参照）。

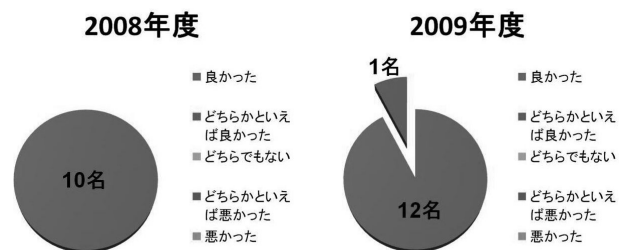


図4. 「研修に参加して良かったと思いますか」

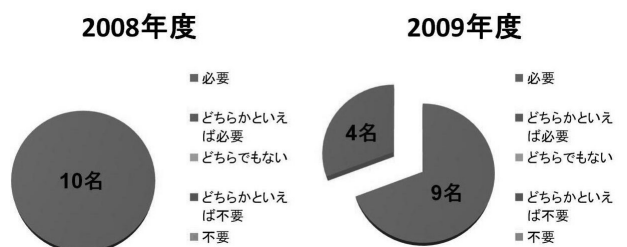


図5. 「この研修は必要と思いますか」

また、「展示作業の仕事の全体像を理解できましたか」との設問には、2008年度は「理解できた」と「まあ理解できた」を合わせると100%（10名）が理解できたとした。しかし、2009年度は両方合わせて84%（11名）と減少し、各8%（1名）が「どちらともいえない」、「あまり理解できなかった」と回答した（図6を参照）。

このほか、「この研修が自己啓発の機会となりましたか」との設問には、2008年度は100%（10名）の受講生が「そう思う」と回答したのに対して、2009年度は「そう思う」が54%（7名）、「どちらかといえばそう思う」が31%（4名）、「どちらともいえない」が15%（2名）であった（図7を参照）。

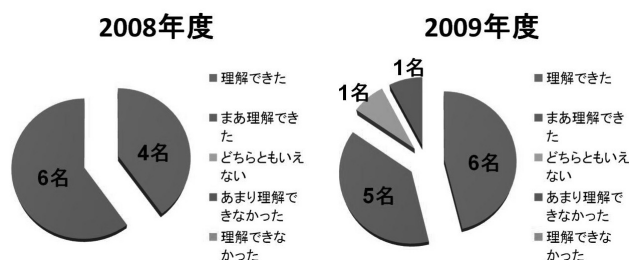


図6.「展示作業の仕事の全体像を理解できましたか」

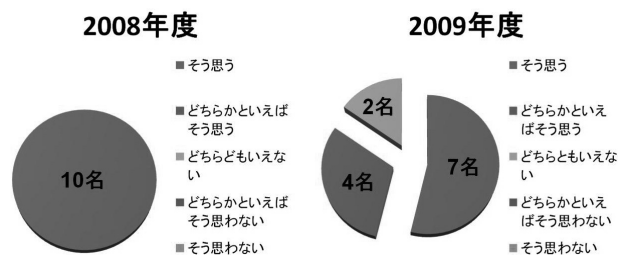


図7.「この研修が自己啓発の機会となりましたか」

アンケートでは、最後に自由記述欄を設けた。以下、2008年度と2009年度のコメントをいくつか紹介する。

まず、2008年度のアンケート結果から肯定的なコメントを抜粋する。

受講生A：「研修を受けることで、自分の日常業務がどのように博物館全体の動きに関わっているのか、見直すことができ、本当に良い経験になりました。博物館の一員としての意識が高まり、仕事をする意欲の向上につながったと感じています。」

受講生B：「…博物館の持つ機能について、おおまかではあるが学ぶことができました。他部署の皆さんと交流を持つ事が出来たのもとても良かったです。もっと時間をかけて研修に取り組みたいと思うほどやりがいがありました。…」

受講生C：「…通常の業務に対してのモチベーションも上がりました。…」

受講生D：「…今回この企画に参画したことで、“みんなばく”で働いている実感をとても味わうことができました。…」

以上、いずれも博物館活動の中で自らの職務がどこに位置づけられているかの理解や、意識・モチベーションの高まりを述べている。

次に、2008年度の結果から否定的なコメントを紹介する。

受講生E：「業務に支障がないように前提ですが、もう少し前から少しずつ準備していくと（実習生も参加して）余裕があってできるのではないかと思います。…」

受講生F：「…良い写真が撮れましたが、時間内にするというのも研修では大切なことだと思います。…」

以上、限られた時間の研修であること、そして時に時間をオーバーして行った研修に対する批判的なコメントである。

以上のアンケート結果を受け2009年度は対策を講じたが、全体的に若干批判的なコメントが増えた。まずは、2009年度の肯定的なコメントから紹介する。

受講生G：「…日頃の業務を別の角度から見る手掛かりもいただけた気がしております。…」

受講生H：「なかなか見ることができない展示の裏側を知ることができ、とても良い勉強になりました。…」

受講生I：「…今後も継続していくことを願います。…」

受講生J：「写真撮影や展示の奥深さに驚きました。…」

コメントの内容としては、2008年度に引き続き自らの業務に対する理解が深まったという声があった一方、研修内容自体を評価する声が多かったことが2009年度の特徴として挙げられる。

反面、批判的なコメントも多かった。

受講生K：「もう少し長い期間での関わりができると面白いと思いました。…」

受講生L：「…もっと時間をかけて取り組みたかった。「博物館学」としての展示に関するノウハウをもう少し詳しく知りたいと思った。」

受講生M：「もう少し準備に時間がかければ良かったです。本当に少し垣間みただけですが、展示作業の流れがわかりました。…」

受講生N：「仕事の合間をぬってなので仕方ないとは思いますが、研修日数が少なすぎて、ほとんど自分達の関与しないところで事が進んでいました。…」

受講生O：「…お忙しい中、ご指導いただくため研修としては時間があまりない様に思いました。…」

受講生P：「展示作業の全体像を理解するには、時間が少なすぎたと思いました。盛りだくさんのプログラムに追われて理解するまでに次の工程に移って行ってしまっただけで残念な感じがしました。」

以上、2009年度は2008年度に比べて研修の時間が短かったとするコメントが多く、2010年度実施に向けての対策が望まれる。

6. 考察

全体的には、2009年度は若干評価を下げたとはいえ、本研修会は毎年度受講生から高い評価を得ており、事務職員を中心とした職員が研修を受講することで展示活動の全体像を理解するのに貢献しているといえる。特に、普段展示活動に直接関わるのではない総務課や財務課などの職員が研修を受講することにより、博物館活動全体の中における自らの日常業務の役割と位置づけを理解することに役立っているといえよう。

また、2008年度に生じた写真撮影研修の時間不足の問題は、2009年度には時間割りを再編し少人数制にしたことにより解決された。こうした改善は、講師を務めた専門員や受講生などから高い評価を得た。前年度の課題を次年度には改善したことにより、研修会としてより充実した内容になったといえる。

しかしながら、2009年度は2008年度に比べて評価が下がったことは事実であり、その検証はせねばなるまい。2009年度は写真パネルの準備に加えて標本資料展示についても受講生に関わらせた。しかし、本研修会は民博の事務サイドの業務時間内に実施する研修会であるため、研修会自体のコマ数は増やすことができなかった。そのため、研修日と研修日の間に研修会プロジェクト・メンバーが展示計画を進める分量が例年より多くなり、結果的に受講生に対しては自分の知らないところで計画が進んでいる印象を与えたことに評価が下がった大きな要因があるとみられる。また、受講生自身も限られた時間の中で例年以上に中身の濃い研修を受ける必要があり、研修内容を消化しきれなかったことも要因として挙げられる。今後は、受講生のこうした小さな不満を解消するために、何をどの程度研修するのか、その質と量の再検討が必要となろう。

このほか、本研修会を2度実施した筆者の経験および外部有識者らとの意見交換の中から導き出された課題と展望を述べる。

本研修会は、2004年度より実施してはいるが、年度毎に教員が提案書を作成・提出し、館内審査を受けた上で実施する単年度のプロジェクト形式による研修会である。そのため、これまでは民博の他の職員研修会全体の中における本研修会の位置づけを明確にしてこなかった。初年度から数えて6回を終え、今後は、全体の中の位置づけを明確にし、他の研修会とのつながりを持たせる可能性を検討すべき時に入ってきている。

また、本研修会は知識や経験のある教員や専門員が、事務職員を中心とした受講生に対して一方的に教えるといったスタンスでこれまで進められてきたが、事務職員がどのように自分たち研究者をサポートしてくれているのかを知る、いわば研究者の「社会リテラシー」向上のための研修会としても位置づけられるべきではないだろうか。

7. まとめ

本研修会は民博の事務サイドの業務時間内に実施する研修会であるため、研修時間を今以上に確保することは困難である。しかしながら、2009年度の受講生だった事務職員らは2008年度の受講生に比べ、本研修会に参加することで自らの日常業務の役割と位置づけを理解するという研修会の本来の役割以上に、より深く展示活動全般について知りたいという欲求を持つ者が多かった。つまり、2009年度の受講生が研修を受講する中で持った小さな不満は、民博の展示活動に関する問題意識や意欲が本研修会を受講することにより受講生の中に芽生えたことを裏付けるものだともいえる。教員や専門員以外の職員が、本研修会で教える以上の展示活動に関する高い知識や技術を身に付ける必要があるかどうかは議論の余地がある。しかし、職員が展示活動全般を理解することにより自らの職務の位置づけを把握し、職員としての意識や認識が向上すること、つまり職員のミュージアム・リテラシーが向上することは、ひいては、民博が社会に対してより開かれた博物館になるひとつのきっかけになり得るものと考えられる。本研修会は、民博教職員の集団としてのリテラシー向上を目指すためにも、受講生や講師陣、外部有識者などの声をより反映させるなど、今後さらなる改善を図りながら継続すべき事業であるといえよう。

参考文献

五月女賢司編『2009年度 展示活動研修会 実施報告書』、
国立民族学博物館とら展プロジェクトチーム

五月女賢司編『2009年度 年末年始展示イベント「とら」実施報告書』、国立民族学博物館とら展プロジェクトチーム

五月女賢司編『2008年度 展示活動研修会 実施報告書』、国立民族学博物館うし展プロジェクトチーム

五月女賢司編『2008年度 年末年始展示イベント「うし」実施報告書』、国立民族学博物館うし展プロジェクトチーム

千葉県文化財救済ネットワークシステム構築推進事業の設立経緯と事業計画

千葉県博物館協会地域振興委員会委員
千葉県立中央博物館 教育普及課長

新 和宏

1. 事業の背景

四方を海と川に囲まれている千葉県は、台風や地震発生時等において、その自然環境が被害を助長する傾向にあることを避けることができない。

また、我が国最大級の埋蔵量を誇る天然ガス鉱床が分布していることは大いなる資源保有という利点の反面、多大なリスクを抱えているとも言える。さらに、過去、発生した地震や竜巻等による被害も記憶に新しい。

このような状況の中、平成16年7月、九十九里町いわし博物館において、天然ガスの流出による爆発事故が発生した。この爆発による被害は甚大であり、施設の倒壊はもとより、イワシ漁に関する古文書等の収蔵資料も多大なダメージを受け、その救済は急務な状況を呈していた。



Fig. 1 収蔵スペースの被災状況



Fig. 2 被災直後の古文書等史料の暫定的保存処理

事故直後、町教育委員会から県教育委員会に対して、被災資料の救済に係る協力要請がなされたことから、県文化財課が中心となり、地元ボランティア、県文書館、県史料研究財団、県立博物館、市町村立博物館の専門職員により暫定的な文化財救済チームを組織した。

20名以上の専門職員が、延べ10日間以上にわたり、被災資料の救済・搬出作業を敢行した。これらの資料は、現在も、中央博物館の本館と分館に仮保管している。

この出来事は、自然災害時の全県レベルでのネットワーク構築の重要性を示唆する体験であった。

2. 設立経緯

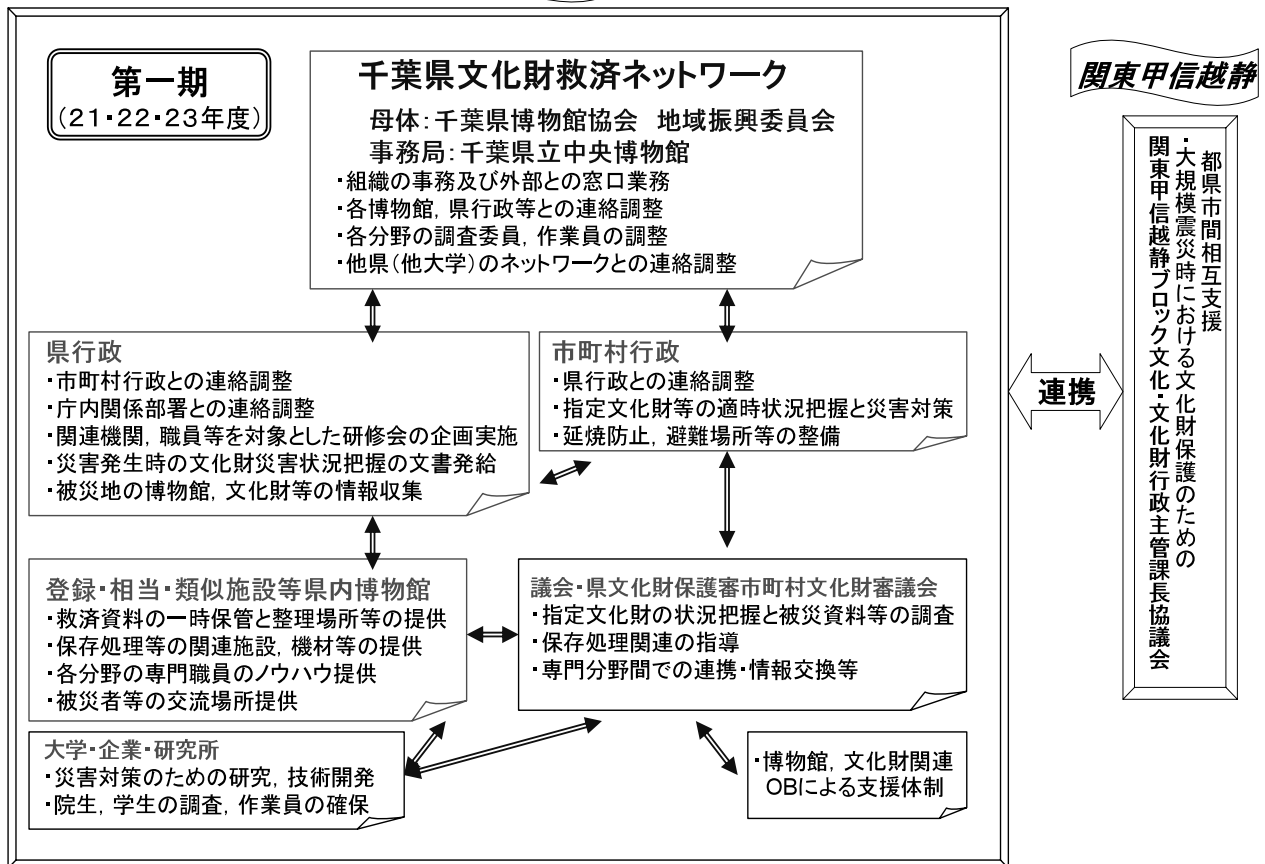
県では翌年度より3カ年でネットワーク構築の必要性を共有するとともに、その具現化に向け、県内博物館、各教育委員会、文化財所有者等を対象に、「千葉県文化財管理指導者講習会」を開催した。ここでは、他県の地震被害に関する状況等について聴講するとともに、文化財等を災害から守る意識高揚と、そのための課題抽出を行った上で、ネットワークの将来像を提示することにより意識の共有化を図った。

千葉県のネットワーク構築構想は、今までの経緯等をふまえ、博物館や行政を主体として事業展開を図る方向性を示した。加えて、専門職である学芸員等の人材の利活用を推進するため、全県下での関係部署の連携が絶対条件とした。

その折、平成21年度文部科学省の博物館ネットワーク構築推進事業の一環で、千葉県文化財救済ネットワークシステム（以下、救済ネット）の構築事業を実施することが具体化したため、県内博物館、約80館で構成している千葉県博物館協会の地域振興委員会が実施主体となり事業展開するに至った。

千葉県文化財救済ネットワークシステムの将来像

千葉県内



3. 救済ネット構築推進事業の計画と将来像

事業全体のフローは、平成21年度から3カ年を第一期とし、他ネットワークの実態調査、その課題抽出を経て、千葉県独自の資料ネットワークシステムを構築、強化する流れである。

併せて、同ネットワーク事業において、最重要テーマである「千葉県の自然・歴史・文化資産を永続的に守る」システムを具現化する使命を实践するため、文化財関係者の資質向上事業の展開と、県民の文化財保護に関する意識喚起の事業展開等を推進していく計画である。

また、当事業は、ミュージアムリテラシーの推進にも寄与する事業であると考えている。

この概念は、利用者が展覧会を見学したり、講座、観察会に参加して知の学びを推進したり、学校や地域、市民が博物館を活用して事業を行う能力だけではなく、地域全体やフィールドを博物館として捉えるフィールドミュージアム構想にまで視野を広げて考えていく必要がある。

さらに、当ネットワークが対象とする文化財は、

博物館の収蔵庫に保管されている資料だけではなく、フィールドにある自然、歴史、文化資産等までを視野に入れている。つまり、我々が考えている文化財や資産は、行政が一括管理している指定文化財はもとより、ある家庭で連綿と受け継がれてきた生活用具や、伝統技術、伝統芸能、職人のわざ等の領域まで含んでいる。

よって、当ネットワークは、フィールドの自然・文化資産全てを後世に伝えていく財産であるとし、その守る手法と組織の構築はもとより、保護の意識喚起についても、重要な役割を担っている。

○平成22・23年度の事業計画

- ① ネットワークの強化（大学、文化財保護団体、研究機関、NPO等市民団体への拡充）
- ② 他の資料ネットワークとの連携
- ③ ミュージアムリテラシー、文化財保護等に関連した県民対象の研修会、シンポジウム開催
- ④ 関連学会等における研究発表と学会誌への寄稿
- ⑤ 第二期（平成24年度以降）事業計画案の構築

マンガによる ミュージアム・リテラシーの向上

文化庁文化財部美術学芸課長

栗原 祐司

1. 日本が誇るマンガ文化

今やマンガは、アニメとともに日本を代表する文化であり、その量と質は、間違いなく世界一であろう。我が国では伝統的にマンガやアニメは子どもが読むもの、という蔑む風潮があり、今でも頑なにそうした感情を持つ方もいるのも事実だが、諸外国で主に若者が日本のマンガやアニメに夢中になり、本屋に日本のマンガ・コーナーがあったり、日本のマンガを原本で読みたいために日本語を習おうという男女が多いことを知れば、もはやそうした考えが時代遅れであることを思い知ることになる。実際、日本のマンガの幅と奥行きは極めて広く、歴史や文学、さらには語学や理工学に至るまで、何種類ものマンガが発行されている。今や、学習指導要領でも、中学校や高等学校の美術で漫画やイラストレーションによって表現することを明記しているし、教科書や副読本にもマンガが登場している。また、2001年に日本マンガ学会が設立されて以降、大学でもマンガを一つの学問として捉える傾向があり、2006年に京都精華大学が全国で初めて「マンガ学部」を設置し、同学部にマンガ学科とアニメーション学科、マンガプロデュース学科を設けている。同年には、京都市との共同事業で「京都国際マンガミュージアム」が設立された。その後も、東京工芸大学芸術学部「マンガ学科」、神戸芸術工科大学先端芸術学部「まんが表現学科」、その他いくつかの芸術系私立大学にマンガコースやマンガ専攻等が設置されたりしている。

一つ課題があるとすれば、いずれもマンガをあくまで絵画表現の延長線上として捉えていることだ。現実には、小説よりもマンガの方が圧倒的に多く読まれており、例えば雑誌一つとっても「週刊少年ジャンプ」の発行部数は年間280万部で、「週刊新潮」の62万部や「文藝春秋」の59万部等をはるかに凌駕しているにも関わらず、マンガが文芸作品の対象となっていない。これはジャンルの違いだと言ってしまえばそれまでだが、小説よりも精緻かつ魅力的なストーリー展開と構成、豊かな表現力で読者を魅了しているマンガも多く、さらなる議論が待たれるところである。

小説などと比べてマンガやアニメでは、「眼光紙背

に徹す」、「行間を読む」、「読書百篇意自ずから通ず」というような感動を得ることはできない。そういう意味では、単なる文化的な記号・表象に過ぎない文字を読むことによって、その情景を読み取り感性を培うという教育的効果はないかもしれない。しかし、絵画と文字の組み合わせによって確実にそのストーリーを追体験することは可能であり、文字以上に強烈な印象となって記憶に刻み込まれる場合もある。実際、海外で人気のマンガやアニメは、絵画表現という、文字小説では決して表すことのできない手段によって、実に卓越した人物設定と物語性を有し、効果的かつ刺激的にストーリーを展開している作品が、読者に強い感動を与えてくれる。子どもだけでなく老若男女が楽しめる作品が多いのは、驚くばかりである。

1990年に東京国立近代美術館で「手塚治虫展」を開催したときには、美術館関係者の間に少なからぬ議論を惹起したもののだが、最近では多くの博物館・美術館でマンガに関する展覧会が開催され、「菌類の不思議展」（国立科学博物館、2008）や「マンガとクルマ」展（トヨタ博物館、2009～10）、「ドラえものの科学未来展」（日本科学未来館、2010）のようにマンガとのコラボレーションによる特別展も開催されるようになってきた。このことは海外でも例外ではなく、2005年には「Shojo Manga! Girl Power!」（「少女まんがパワー！」展）が北米9都市を巡回しているし、2006年から2007年にかけて「Tezuka: The Marvel of Manga」（手塚治虫：マンガの驚異展）が、ヴィクトリア国立博物館、ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館及びアジア美術館を巡回している。昨年文化庁が大英博物館で開催した海外展「The Power of DOGU」（土偶展）では、関連展示として土偶を取り上げたマンガも展示され、同時に星野之宣『宗像教授異考録』をモチーフにした「Manga: Professor Munakata's British Museum adventure」（2009～10）が大英博物館の企画で開催されたことは注目に値する。



「少女まんがパワー！」展
（2005 北米9都市巡回、2008
川崎市市民ミュージアムほか）



“Manga: Professor Munakata's
British Museum Adventure”
（大英博物館、2009.11～2010.1）

また、全国各地にマンガ美術館やマンガ家の記念館等が設置されるようになってきており、宝塚市立手塚治虫記念館（兵庫県宝塚市）、青梅赤塚不二夫会館（東京都青梅市）、香美市立やなせたかし記念館アンパンマンミュージアム（高知県香美市）等例を挙げれば枚挙に暇がない。中には、水木しげる記念館と水木しげるロード（鳥取県境港市）、長谷川町子美術館とサザエさん通り（東京都世田谷区）、石ノ森萬画館と石巻マンガロード（宮城県石巻市）のように、まちづくりや地域振興の拠点として整備されている例も少なくない。

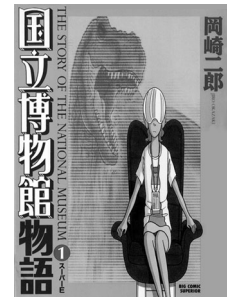
今やマンガは、いわゆるサブカルチャーではなく、日本を代表する文化の一つになったように思う。実際、視覚に訴えるマンガの情報量は、小説等よりも圧倒的に多く、表現方法でもストーリーでも、何度も何度も読み返す子どもたちを満足させることができないようなマンガや、大人の知的好奇心を満足させることのできないような作品は、淘汰されていくことになる。マンガ業界も弱肉強食で、読者の人気がないければストーリーの途中でいきなり連載打ち切りになるようなシビアな世界である。数多くのマンガ家やその関係者が切磋琢磨することによって、我が国のマンガの質を高くしているのである。これだけ多くの日本人に浸透し、裾野の広い我が国のマンガ文化を、他の国が追随するのは容易ではないだろう。

2. ミュージアムを舞台・テーマにしたマンガ

ミュージアムを舞台・テーマにしたマンガには、以下のようなものがあるが、単発でミュージアムが登場する例を含めれば、さらに多くの例を挙げることができる。これらの中には、異能力者である主人公が活躍するケースが多くみられ、荒唐無稽なものもある。

- ・岡崎二郎『国立博物館物語』（小学館、1996～1999）
- ・細野不二彦『ギャラリーフェイク』（小学館、1992～2005）TVアニメ（2005）
- ・愛英史原作、里見計画『ゼロ THE MAN OF THE CREATION』（集英社、1990～連載中）
- ・小池一夫原作、叶精作画『オークションハウス』（集英社、1991～2003）
- ・加藤元浩『C. M. B 森羅博物館の事件目録』（集英社、2005～連載中）
- ・藤田和日郎『黒博物館 スプリングルド』（講談社、2007）
- ・岩館真理子『まだ8月の美術館』（集英社、2001）

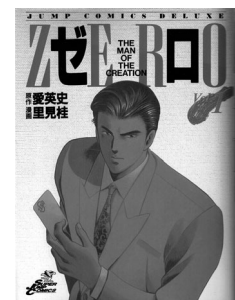
- ・タナカカツキ『オッス！トン子ちゃん』（扶桑社、2003）（ポプラ社、2009）
- ・須藤真澄『アクアリウム』（新声社、1994）（秋田書店、2000）
- ・玖保キリコ『バケツでごはん』（小学館、1993～1996）TVアニメ（1996）
- ・吉田仲良『アサヒ！～動物園に行こう～』（芳文社、2010～連載中）
- ・渡辺電機（株）『水族館バカー代』（白泉社、2007）
- ・飯盛広一『ぼくの動物園日記』（集英社、1972～1975）『これから動物園』（小学館、1975）『家族動物園』（朝日ソノラマ、1983）
- ・折原ひと『星になった少年。—夢に生きた少年ゾウ使いの物語』（講談社、2005）映画（2005）
- ・森田民原作・本庄敬画『ASAHIYAMA —旭山動物園物語』（角川書店、2007）TVドラマ（4回・2006～2010）、映画（2009）
- ・黒沢明世『みんなの動物園 いづみの飼育係日記』（秋田書店、2005～2006）
- ・青木幸子『ZOO KEEPER』（講談社、2006～2009）
- ・藤崎聖人『ワイルドライフ』（小学館、2003～2008）、TVドラマ（2回・2008）
- ・柏原麻実『宙のまにまに』（講談社、2005～連載中）TVアニメ、インターネットラジオ（2009）



岡崎二郎『国立博物館物語』（小学館、1996～1999）



細野不二彦『ギャラリーフェイク』（小学館、1992～2005）



愛英史原作、里見桂画『ゼロ』（集英社、1990～連載中）

3. 広報媒体としてのマンガの活用

学術的、専門的な内容を対象とした作品も多い。例えば、竹内薫著（画・松野時緒）『ねこ耳少女の量子論』（PHP研究所、2009）は、「萌える最新物理学」というサブタイトルがついているように、難解な量

子論をいわゆる“萌え”系のマンガによってわかりやすく説明している。大学でもこうした効果を活用しており、京都大学では京都精華大学と連携し、両大学の教職員・学生が参加するマンガプロジェクトを立ち上げて『マンガによる京都大学紹介冊子』を作成し、その後両大学で連携協力に関する基本協定を締結したし、同志社大学でも、『マンガで読む新島襄 自由への旅立ち』を発刊した。企業や宗教法人でもマンガを活用しており、本木正次原作、影丸譲也画『劇画 トヨタ喜一郎』（講談社、1969）、『京セラ創業者 稲盛和夫物語』（京セラ株式会社、2010）、『伝教大師』（比叡山延暦寺、1979）などの例がある。

官公庁でも、環境庁では『マンガで見る環境白書』（国立印刷局、1994～2001）を発行していたし、経済産業省は『日本の未来はのぞみにおまかせ！～マンガでわかる新経済成長戦略』（画・連打一人、日経BP、2009）を出版した。また、文部科学省でも「家庭教育手帳」「家庭教育ノート」（画・青沼貴子、1999～）でマンガやイラストを多用しているし、『まんが子ども科学技術白書』（（株）学習研究社、1999～）を毎年発行している。さらに、月刊「文部科学時報」で1ページの連載マンガを掲載しており、中央官庁においても、既にマンガが市民権を得ていることがうかがわれる。各地方公共団体でも、地元の偉人や地方史を紹介するためにマンガを活用している例は多く、例えば静岡県では、石ノ森章太郎監修『マンガ静岡県史』（静岡県、1997年）を発行しており、宮城県、千葉県、福井県、三重県などでもマンガによる県の歴史本を発行している。市町村でも、例えば群馬県では9市町村がマンガによる歴史本を発行しており、ミュージアム・ショップで販売している例が多い。これらは、子どもだけでなく広く広報普及効果が認められるからこそ活用されているものと思われる。しかしながら、必ずしもトップレベルのマンガ家が執筆しているとは限らず、予算の制約等にもよると思われるが、中には稚拙な表現のものもみられるのは残念である。

なお、ミュージアムでもオリジナル・マンガを作成しており、大阪商工会議所が運営する大阪企業家ミュージアムは、同施設で展示する人物のエピソードを紹介する漫画冊子シリーズ『企業家の人生に学ぶ』を作成した。このほか、京都国際マンガミュージアム作成の『サムライたちのメキシコ』、足寄動物化石博物館作成の『マンガで解説する足寄の化石』等の例がある。また、ミュージアムや史跡の展示にもマンガを活用するケースもあり、富山市科学博物

館や芝山市にはわ博物館、史跡新池埴輪製作遺跡の展示解説パネル等の例がある。

4. マンガによるミュージアム・リテラシーの向上に向けて

アメリカ映画『ナイト・ミュージアム』（原題『Night at the Museum』（2006、2009）は、日本国内でも人気を博し、博物館等でも上映された。しかしながら、娯楽性を求めるがゆえにミュージアムの展示機能ばかりが強調され、調査研究、保存、修理等の機能がまったく描かれておらず、ミュージアム・リテラシーの向上にはほとんど寄与しなかったことが悔やまれる。

一方で、テレビアニメ化された有川浩『図書館戦争』は、「図書館の自由に関する宣言」を守ることが主要テーマの作品であり、若干娯楽性が高いとはいえ、図書館の使命・役割を考えさせるきっかけとなる作品であったように思う。博物館についても、その求められている機能や役割、その必要性や課題等について考えさせるようなマンガが必要ではないだろうか。近年、動物園についてはその萌芽が見て取れるように思われるが、ミュージアムの求められている機能や役割、その必要性と課題等について、市民一人一人が考えるきっかけとなるようなマンガと、それをもとにしたドラマ、アニメ、映画等の登場が待たれるところである。

山本鈴美香『エースをねらえ！』や高橋陽一『キャプテン翼』などが爆発的なテニスやサッカー人気を誘発したことはよく知られるところであるし、佐々木倫子『動物のお医者さん』によって大学受験で獣医学部の倍率が急上昇したり、さいふうめい・星野泰視『哲也—雀聖と呼ばれた男』によって麻雀人気が高まったことも記憶に新しい。市民のミュージアム・リテラシーを高めるために、もっとマンガを有効に活用できないものだろうか。多くの市民に読まれているマンガ雑誌を活用しないという手はない。市民のミュージアム・リテラシーを高めるためのヒントは、身近なところに潜んでいる。我が国のミュージアム・リテラシーを高めるとい目標に向けて、情熱をもって取り組んでいくことが必要である。



久世番子『博物館ななめ歩き』
（「文部科学時報」連載中）

小学校教員を目指す非理系学生の 理科指導力向上を通じた リテラシーの涵養

(独)国立科学博物館

亀井 修・小川 義和
永山 俊介・渡辺 千秋

静岡科学館 高橋みどり

元(独)国立科学博物館 水野麻衣子

背景と目的

知識や文化の継承にとって学校や教育の担い手である教員の果たす役割は大きい。教員の養成については大学が、採用については教育委員会が一義的にはその任を負っている。社会状況の変化により、これまでと同等、あるいはより高度な教育サービスをより効率的に提供していくことが求められている。個別の教員のライフステージと、その人材養成に投入される資源の関係をイメージを図1に示す。図では職業としての専門性が求められるライフステージにおいて、社会的資源の投入が必ずしも十分ではない懸念を示している。

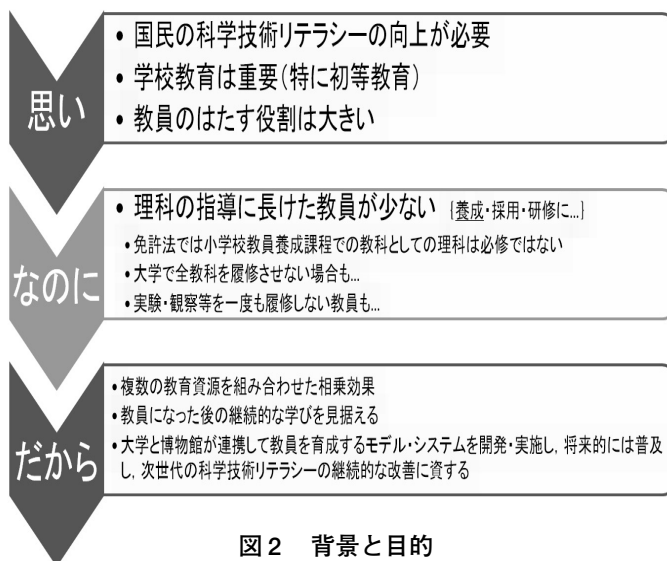


図2 背景と目的

社会の状況を考えると、個人や単独の主体だけで必要とされる資源の質や量に対応していくことは困難な場面が増えてきている。また、社会全体としての効率を考えると、限られた資源を効果的に投入していく必要がある。このような視点から、複数の主体が連携してそれぞれの特徴を生かす形での対応が期待されている。

今回は報告されている小学校教員の状況を鑑み、博物館と大学等が連携した教員養成系学生の科学リテラシーの直接的向上をまず考えた。その際に、リテラシーが高まった教員を通じた、次世代の子どもたちの科学リテラシーの向上とそれによる社会全体の科学リテラシーの向上の可能性についても視野に入れて検討を行った。(図2)

方法

教育現場や養成現場の調査に基づき目指すべき教師像を「自信を持って、子供たちに理科の指導ができる人」「自然界の不思議さに気づき、その感動を子供たちに伝えられる人」「自然や社会に対して興味・関心を示し、継続的に自ら学ぶことができる人」と設定した。それを実現する方策として、「基礎的な理科の知識及び実験技能を身につける」「体験活動を行い、それを表現し伝える能力を身につける」「学習資源を活用する能力を身につける」の方針を立てた。それに基づき、将来的な各地域での実施や実情に応じた連携システムへの発展を視野に入れた教員を目指す学生の能力を補完する学習プログラムを開発・実施した。開発の基本コンセプトと主なプログラムの項目を図3に示す。

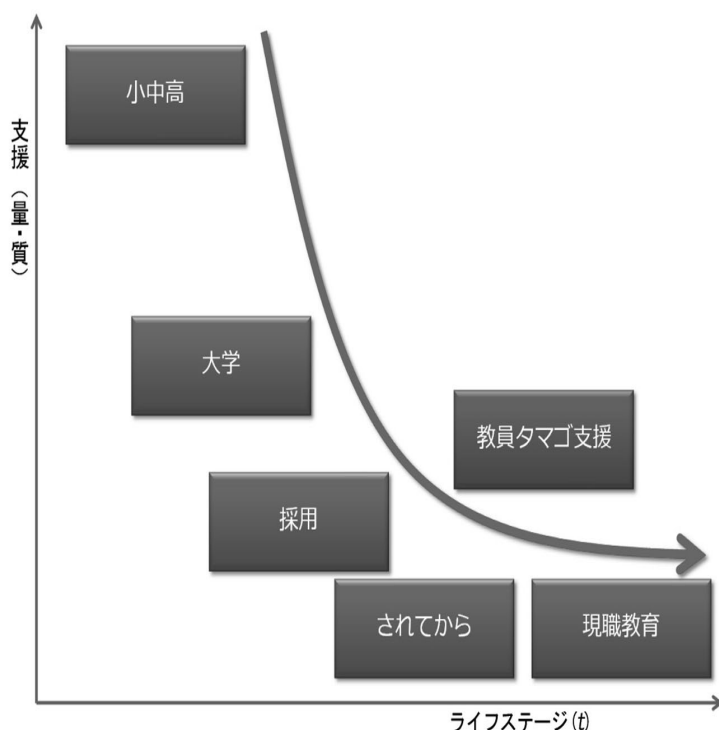


図1 教員のライフステージと人材養成に投入される社会的資源のイメージ

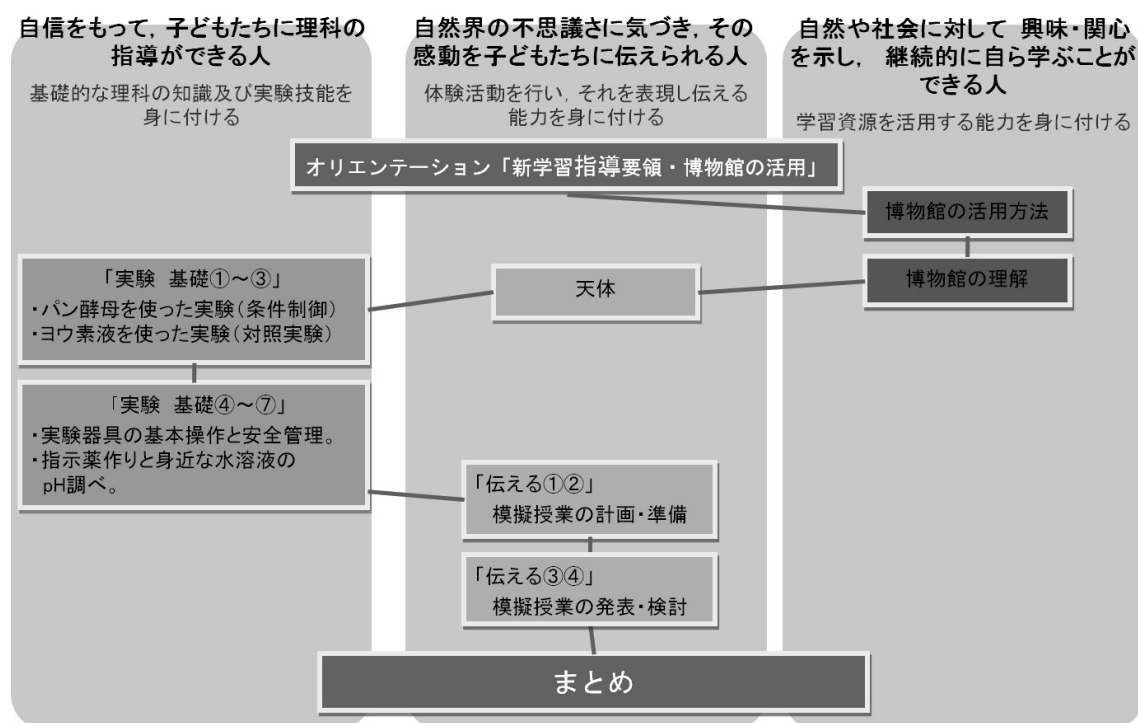


図3 基本コンセプトとプログラムの主な項目

結果と考察

小学校教員の科学リテラシーの向上を目的として非理系学生の理科指導力を向上させるため、大学の外部の学習資源として博物館を活用してプログラムを開発した。教員採用試験に合格した学生を中心対象として2年間28人の学生で試行した。そのうち15名は、現職の小学校教員として活躍している。

- ・有識者による検討と2度の試行、受講生への調査を行いプログラムについては一定の完成度を果た
- ・地域や個人に応じた実施システムの構築については、大学との緩やかな連携のモデルを示すに留まった
- ・本講座を実施することにより、従来当館の利用が少ない文系学生への直接的な科学技術リテラシーを向上できた。
- ・博物館を活用する基礎的能力を身につけることにより、学生は継続的に科学技術リテラシーの更新を行うチャンネルやネットワークを確保できる
- ・将来教員となって学校で子ども達を指導することにより、積極的な博物館の活用や科学技術に対する知識や態度が文化として次世代に波及していくことが期待できる

教員養成は大学が、採用と現職教育は各教育委員会が、行うこととなっているが、社会の各セクターが協働して育成する必要性も指摘されている。今回の調査研究では、博物館の資源を活用して科学的素養を向上させるプログラム「明日の先生へ送る 理科のコツ」の開発・試行・改善・再実施を行ったが、文系学生を対象とした場合、投入資源に比して大きな効果が期待できることが見えてきた。今回の取り組みは、科学技術リテラシーと博物館リテラシーを向上させるモデルとして一定の成果が得られたと考える。

博物館側の視点からみると、今回開発したようなプログラムを各地の実情に応じた形にアレンジして普及させることにより、従来博物館を利用していない層の人々へ直接的な働きかけを行うことができる。とともに、教員になった後も生涯利用できる学習施設である博物館を活用する基礎的能力を身につけさせることができ、継続的にその時代に応じたりテラシーの更新を行う社会的なチャンネルを確保することができる。

このような博物館活用能力（ミュージアムリテラシー）を身につけた教員が、各地の学校で子ども達を指導することにより、科学技術を含む人類の英知の蓄積に対する知識や態度が文化として次世代に浸透していくことが期待できる。（図4）

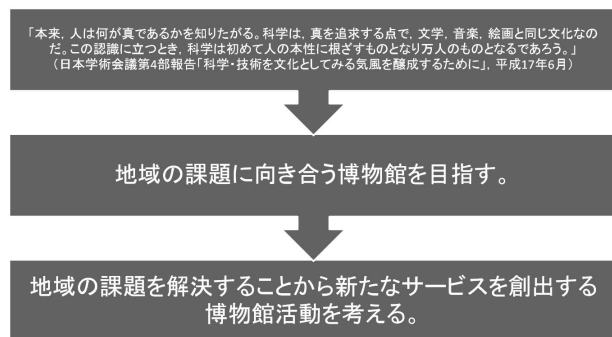


図4 社会における博物館と社会のための博物館

謝辞

本研究は、小学校教員養成課程を支援する科学技術体験プログラム実施システムの研究開発、科学研究費補助金 基盤研究B課題番号19300269（研究代表者・亀井修）等により行われた。お力添えやご指導をいただいた関係各位に厚く謝意を表します。

インターネットにおける博物館に関する市民のコメント調査

慶應義塾大学大学院後期博士課程

本間 浩一

1 背景と目的

公的な博物館の多くは、地方自治体等からの財政的な支援に支えられている。市民は、納税によって間接的に博物館経営に参加しているが直接の影響は持てない。しかし、事業が市民に支持されているかどうかは自治体にとっての重要な判断材料であり、個々の市民が事業に参加したり評価・意見を表明・公開したりすることは間接的な影響力を持つ。

博物館におけるボランティア活動に関して社会教育計画研究会が2006年に全国の博物館に対して行った調査結果では、有効回答 554館のうち62%の博物館でボランティアの受け入れが行われており、市民参加の仕組みとして普及していることがうかがえる。参加する市民が行う活動としては、展示解説・資料作成を通じた教育活動の支援等が多い。

一方、市民側の視点で考えると、現在のボランティアプログラムには地理的・時間的な制約があり、参加可能な市民は限定される。平成15年に内閣府大臣官房政府広報室が行った「文化に対する世論調査」

では、文化芸術活動に対する支援に関する市民の割合は、経験者9.2%に対し希望者が44.7%（是非行ってみようと思う十多少は行ってみようと思う）である。支援の受け皿となるプログラムへの潜在的な期待は大きい。

一般市民が公的活動に参加・貢献するためのツールとしてインターネットは大きな可能性を持っている。博物館を利用する市民の一部は、自ら運営するブログを使って積極的に博物館に対する感想・評価等を記事として公開している。これらの記事が博物館や展覧会の広報に寄与した一つの試行事例は、既に「市民が博物館を支援するプログラムの試み—2009年 福澤諭吉関連の展覧会の事例—」（日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要（14）2010/3）で報告した。

このような、インターネットを使った支援プログラムと従来のボランティアとの対比を表1に示す。

表1 博物館に対する支援活動の5W1H

	従来のボランティア	ネット上の広報支援
Who 誰が	退職者、主婦、等	テーマへの関心
Why なぜ	生涯学習機会	自らの活動の延長
What 何を	展示解説、等	広報活動への協力
How どのように	入場者のサポート	ブログでの記事執筆
When いつ	博物館の開館時間	制約なし
Where どこで	博物館内	制約なし

参考：社会教育計画研究会 2006年の調査

さて、上記の事例のような特別の企画がなくても、既にインターネット上では博物館に対する評価や感想を一般の市民が自主的に多数執筆・掲載している。その多くは、個人で運営しているブログを利用している。（図1）今回、この市民活動の規模を定量的に把握し構造を分析するために日本語のブログ内の日本の博物館の名称の出現状況の調査を行った。

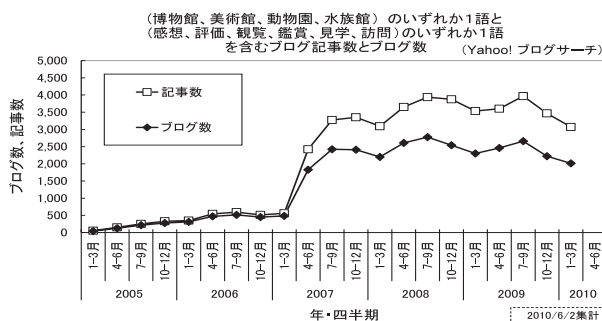


図1 博物館に関するブログ上の記述の量の推移

この発表では、博物館・展覧会等への自らの関心に基づきインターネット上のサービスとして普及しているブログを用いて博物館の紹介や展覧会の感想

等を自主的に執筆・公開する市民を「博物館プロガー」と呼ぶ。

2 方法

ブログの成分解析を行う企業（(株) きざしカンパニー）の協力を得て、博物館等に言及した記事を一定量以上掲載している3,851個のブログを抽出し、それらのブログの約1年にわたる記事を対象に個別の博物館名称の出現状況を調査した結果を図2に示す。

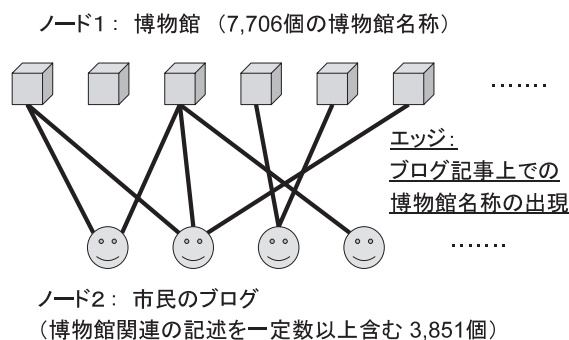


図2 博物館と市民との関係の調査の模式図

博物館名称のデータとしては、「インターネット・ミュージアム」で2010年3月19日に公開されていた全データ7,801件から、特定の博物館に関連付けることが難しいものを除外し、最終的に7,706件を調査の対象とした。なお、「インターネット・ミュージアム」では、ミュージアムの定義を広義にとらえており、博物館法上の博物館・博物館相当施設・博物館類似施設に必ずしも限定されていない。

3 結果

(1) 博物館とブログのネットワーク

データの解析の結果、2,575個のブログ上の25,530個の記事（ページ）で、2,541種類の博物館名称が確認できた。ブログと博物館との組み合わせの数は、17,044だった。図3でこの関係を模式的に表した。

1つの博物館の名称がいくつかのブログに掲載されているかの度数分布（図4）を示す。この分布は、ベ

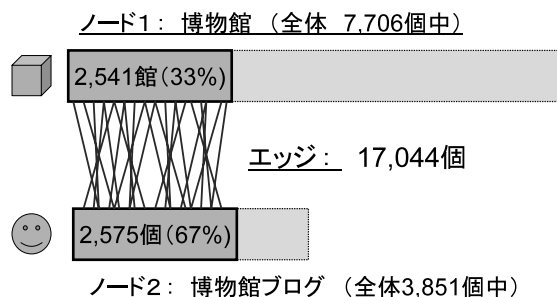


図3 博物館名称と博物館ブログのマッチング

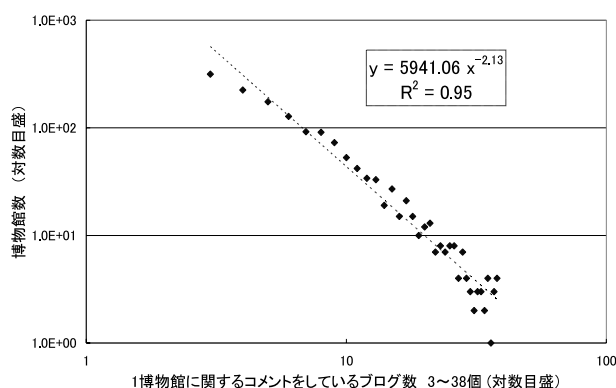


図4 言及ブログ数ごとの博物館の度数の分布

き乗関数で近似できる。その博物館の名称を言及しているブログの数が多い順に、上位20位までを表2に示す。大都市の美術館が多いことが見て取れる。

また、逆に、1つのブログが掲載している博物館名称数の度数分布もべき乗関数で近似できた。これにより、博物館とその名称を引用するブログが構成するネットワークのスケールフリー性を確認した。

表2 言及するブログ数が多い博物館

No.	博物館オリジナル名称	館の種類	所在地	言及している ブログ数
1	国立新美術館	美術館	東京都	334
2	東京国立博物館	歴史系博物館	東京都	285
3	東京都美術館	美術館	東京都	199
4	国立西洋美術館	美術館	東京都	198
5	東京都現代美術館	美術館	東京都	178
6	姫路城	史跡・公園	兵庫県	175
7	Bunkamura ザ・ミュージアム	美術館	東京都	168
8	幕張メッセ	展示場	千葉県	164
9	国立科学博物館	科学館	東京都	150
10	新宿御苑	史跡・公園	東京都	149
11	江戸東京博物館	歴史系博物館	東京都	140
12	上野の森美術館	美術館	東京都	137
13	海遊館	歴史系博物館	大阪府	136
14	横浜美術館	美術館	神奈川県	126
15	パシフィコ横浜	展示場	神奈川県	120
16	サントリー美術館	美術館	東京都	118
17	金沢21世紀美術館	美術館	石川県	117
18	京都国立博物館	歴史系博物館	京都府	114
19	東京都写真美術館	美術館	東京都	113
20	東京国立近代美術館	美術館	東京都	104

(2) 博物館とブロガー（ブログの運営者）の地理的な相関

718名のブロガーについての都道府県レベルの住所データと、それらのブロガーがブログ上で名称を引用した博物館の所在都道府県データと比較を行った。博物館名称の引用の65.2%は、所在地（都道府県）以外に居住するブロガーによって行われている（表3）。大都市圏の博物館とブロガーは全体ネットワークの中で重要なハブとなっており、大都市圏以外の地方の博物館にとっても、大きな影響力を持

表3 ブログの住所と博物館の所在地

博物館ブロガーは、 居住都道府県外の博物館にも幅広く関心を持っている。			
			数量
都道府県レベルでブログの住所がわかるブログ数(海外も含む)			718
博物館に対する言及の延べ数			4,699
内訳	住所と所在地の都道府県が同じ	1,636	34.8%
	異なる場合	3,063	65.2%

ちえる。それらの活動を全国の博物館ネットワークに活かす余地があると考えられる。

4 まとめと展望

(1) 博物館ブロガーの出現

今回収集・解析したデータは、市民全体の平均的な挙動を推定するための標本ではない。インターネット上でより積極的に博物館に関する記事を作成している市民セグメントに焦点をあてた。このセグメントに属する市民の数は限られているが、他の市民に対する影響力は大きい。今回の発表では、その具体例である「博物館ブロガー」が既に多数存在していることを示した。彼らは、博物館にとって協力者である。今後、活動者の絶対数の増加と、活動が他の市民に与える影響の効率向上によって、博物館の運営に大きな影響を与えることが可能になると考える。

ただし、今回の調査で抽出したブロガーの多くは、居住している都道府県の範囲を超えた広い地域の博物館に関心を持っている。自治体が運営する公立の博物館では、利用者として意識する対象は地元の住民であろう。自治体の枠を超えて関心を広げる「博物館ブロガー」を博物館の活性化に活用するには、その数・活動量等の量的な面だけでなく、個別の地域・博物館の観点だけでなく横断的なネットワークとしての面も認識する必要がある。

(2) 今後の研究

今後は、「博物館ブロガー」の性別・年齢等のプロフィール、地域的な関心の広がり、関心の対象を示す可能性のある館の種類についての分析を進めたい。また、対照を特定の領域に絞って意味的な内容の分析にも踏み込みたい。特定の領域の例は、地域や館種である。「千葉県」や「科学館」といった範囲に着目した分析からさらに多くの知見を得たい。

さらに、現在は自主的に個別に運営されている「博物館ブログ」群全体としてシステムと見立て、発展のために可能な手段も検討したい。

■参考

社会教育計画研究会「社会教育施設におけるボランティア活動の現状—調査報告2006—」(2008年)
内閣府大臣官房政府広報室世論調査担当「文化に対する世論調査」(平成15年11月)
<http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-bunka/index.html>
ブログランキング&成分解析! blogram
<http://blogram.jp/> (きざしカンパニー)
インターネット・ミュージアム
<http://www.museum.or.jp/> (丹青グループ)

公立動物園の地域との連携に関する一考察

文部科学省科学技術政策研究所

牧 慎一郎

1. 公立動物園における地域連携

旭山動物園のブレイクを契機とする動物園ブームの影響もあって動物園への注目は高まっているが、一方で、動物園を運営する自治体の財政は危機的であり、また来園者数の減少という長期トレンドの中で、動物園が厳しい経営環境に置かれていることには変わりはない。そのような中、近年、先進的な公立動物園においては、地域の市民や地元企業との連携を図る動きが目立っている。そこで、本稿では、公立動物園における地域(市民や企業)との連携について、いくつかの事例を紹介しつつ考察を加えることとする。

2. 京都市動物園における市民との連携の事例

市民との協力の興味深い取組みとしては、京都市立京都市動物園の再整備構想の検討過程が興味深い。

京都市動物園は、明治36年に創設された市立・直営の動物園であり、美術館等の文化施設が集積する岡崎地区にある。京都市では、平成21年11月に「共汗でつくる新「京都市動物園構想」」を策定したが、この検討に当たっては、「動物園大好き市民会議」を設置して専門委員会による議論を進めた。市民委員によるワークショップの開催、京都市未来まちづくり100人委員会との連携、パブリックコメントといった、多くの地域市民を巻き込んだ過程を経たことが特徴である(図1)。その結果、園内の施設の展示コンセプトやゾーン毎のテーマが設定されるととも

に、「市民との共汗でつくる動物園」などの運営コンセプトが設定された。

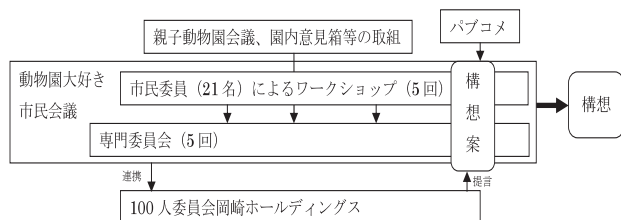


図1 京都市動物園構想の検討過程

3. 大阪市天王寺動物園における地元企業との連携

地元企業との連携の興味深い例として、大阪市立天王寺動物園（直営）の例を取り上げる。

天王寺動物園は、大正4年に創設された市立・直営の動物園であり、通天閣のある新世界エリアに隣接した天王寺公園内にある。近年施設整備を進め、生態展示では国内でも最も先進的な展示を行う動物園である。

地域連携の例としては、天王寺動物園のホッキョクグマの導入（平成18年4月）の際の、551蓬莱（肉まん、アイスクャンディー等を主力商品とする大阪では知名度が高い企業）による資金面での支援が挙げられる。このホッキョクグマは、551にちなんで「ゴーゴ」と名付けられ、動物園の人気者になった。蓬莱では商品の宣伝としてゴーゴグッズ（図2）を配っており、これが自然と天王寺動物園の宣伝にもなるという、ウィンウィンの関係が構築された例と言えるだろう。



図2 蓬莱店舗で配布されたゴーゴ団扇

また、通天閣観光（株）、阪神高速道路（株）、大阪信用金庫、大阪芸術大学等の協力を得て、隣接する高速道路の外壁にアフリカサバンナの空の風景をペイントしたプロジェクト（平成21年7月公開）も、地域の力を結集した興味深い取組みである（図3）。



図3 地元との協力による高速道路の壁面ペイント

4. 考察と展望

このように地域の力（アイデア、人材、資金等）を借りることは、厳しい経営環境の中で経営資源を確保する取組みとしても理解できる一方、それに留まらず、地域の参画による動物園経営という方向性が進展しつつあると捉えることもできる。

京都の例では、基本構想の検討過程に市民を巻き込むことによって、市民自身が動物園を自分たちの所有物として理解するようになる効果も期待できるだろう。検討に関わった市民が今後の構想の実現への支持者となってくれることが期待でき、今後の動物園運営への積極的な関与も期待される。大阪の例では、地元企業が動物園への支援に価値を見出している例であり、動物園に対する一般市民からの支援と相まって、地域の輪による動物園運営という可能性が開けることだろう。

また、このような地域連携の考察から、公立動物園について、単なる行政サービスの提供機関から社会的な価値を提供する地域の共有物という視点を転換することも展望できよう（図4）。筆者は、ミュージアムが人と人を繋ぐ場であり、地域活性化のドライバーとなりうる存在として期待をしているが、その場をどのように設計・コーディネートして、展開・維持していくかが今後の課題となると考えている。

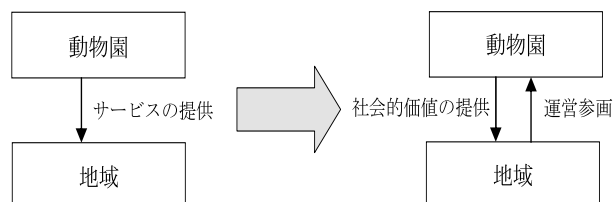


図4 公立動物園経営の変化の方向性

科学館における教育プログラムの評価手法に関する調査研究

(財) 日本科学技術振興財団・科学技術館

中村 隆・小林 成稔
鈴木まどか・田代 英俊

1. 教育プログラムの評価における課題

多くの科学館で、実験ショーや実験教室、工作教室等の教育プログラムが行われているが、それらをより効果的なものとするためには評価が不可欠である。その評価においては、

- ① 取り上げるテーマや分野についての来館者の意識や学習度の把握
- ② プログラムの効果を測る基準の明確な設定
- ③ プログラムの効果の測定手法の設定

が重要となる。特に、①については来館者の意識や学習度を把握しなければ、館側の一方的な考えのもとにプログラムを開発してしまう可能性がでてくる。これは当たり前のことと思われるだろうが、時間やコストの面からも実践できている例はあまり多くはない。また、②と③については、プログラムの形態や内容等によって変わるものであり、普遍的な基準や手法を設定することは難しい。

そこで、本調査研究では、ひとつのケーススタディとして来館者の意識と効果を測る基準を検討したうえで効果測定手法を提案し、実際に試行して、その有効性について考察した。

2. 効果測定手法の提案と試行

(1) 来館者の意識・学習と調査

本調査研究では、「環境・エネルギー」をテーマに取り上げた教育プログラムを対象とし、まず来館者の環境およびエネルギーについての関心度と学習度についてアンケート調査を行った。

図1に関心度を示す。図より「とても関心がある」または「まあまあ関心がある」とポジティブな回答をしているのは、子どもで、環境、エネルギーとも80%以上となっており、大人も環境で80%以上、エネルギーで70%と、とても関心が高いことが分かる。

しかし、図2に示した学習度については、環境やエネルギーについて「よく習っている (いた)」または「まあまあ習っている (いた)」と回答しているのは、子どもでは、環境で約50%、エネルギーで約30%となっており、大人にいたっては、環境、エネ

ルギーとも20%程度と低くなっている。

これより、来館者は環境とエネルギーについて関心は高いが、学習したという意識はあまりないことがわかる。

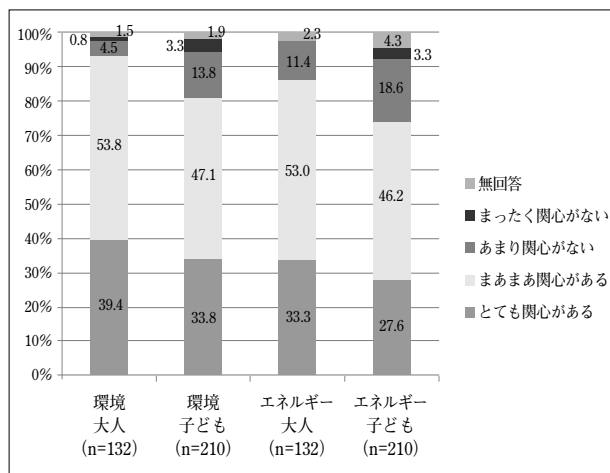


図1 環境・エネルギーへの関心度

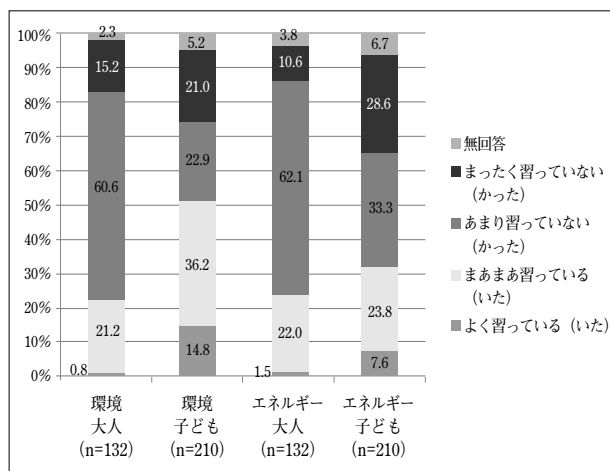


図2 環境・エネルギーの学習度

(2) 効果を測る基準の検討

次に、教育プログラムの効果を測る基準を検討するために、このような意識を持った来館者が「環境・エネルギー」に関する展示を体験したときの効果についてアンケート調査を行い分析した。分析では、展示への満足度と展示による興味の喚起度、展示による知識の獲得度に注目し、これらの相関を調べた。

分析の結果、この3つには相関があることが示された (図3 参照)。つまり満足度を上げるには、興味の喚起度もしくは知識の獲得度を上げればよいと言える (例えば、知識の獲得度を上げれば興味の喚起度も上がり、満足度も上がる)。

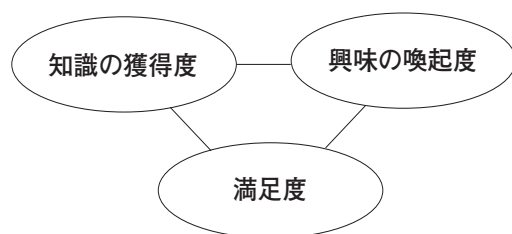


図3 満足度、興味の喚起度、知識の獲得度の相関

以上の結果より、興味の喚起度、知識の獲得度、そして満足度のいずれもが教育プログラムの効果の測定基準となりうると考えられる。特に知識の獲得度については、テスト形式などにすれば定量的な測定を行うことができる。そこで、本調査研究では、測定基準として知識の獲得度に注目した。

(3) 効果測定手法の提案と試行

「環境・エネルギー」をテーマにした実験ショーを試作して実際に来館者に試行し、その理解度を測った。効果の測定は以下の手順で行った。

(i) 実験前クイズ：

実験ショーの前にテーマに関するクイズで認識度をチェック

(ii) 実験ショー：

クイズの答えを示す実験ショーを演示
(注：答え合わせではない)

(iii) 実験後クイズ：

実験前クイズとほぼ同じクイズを行い、実験ショー前後の結果を比較

図4に実験前クイズと実験後クイズの各問題の得点(参加者の平均点)の変化を示す。図より、すべての問題で実験後の点数が上っており、実験ショーの効果が出ていると言える。また、この実験ショーは、解説でフリップを使う場合と使わない場合の

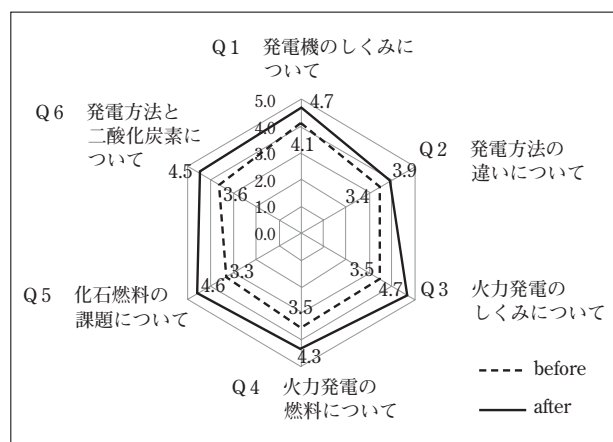


図4 実験前後の得点の変化

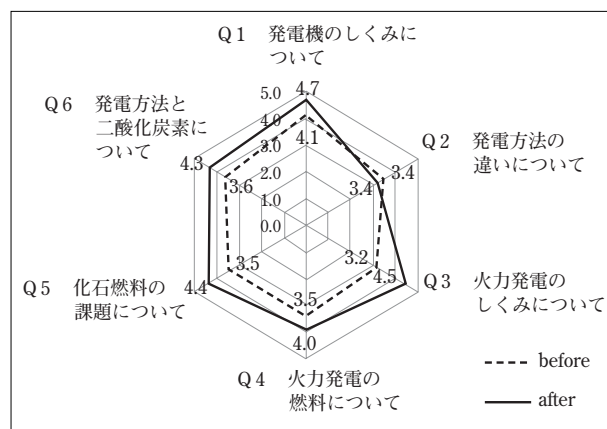


図5 実験前後の得点の変化 (フリップなし)

2つのパターンで行い、その効果の違いを調べた。フリップなしの場合、問題によっては実験後の点数が下がっている(図5参照)。つまり、口頭説明だとかえって誤った理解をさせてしまう場合があることが示された。

さらに、実験後クイズでは、実験ショーで理解できたと感じたかどうかをアンケートした。その結果、理解したと自分で感じていても、クイズの得点は下がっている場合が生じていた。また逆に、理解できなかったと感じていても、クイズの得点は上がっている場合も生じていた。アンケート調査は、あくまでも自己申告であるため、感覚的な理解度と実際に理解度に差が生じることは十分注意しなくてはならない。

3. 効果測定手法の有効性

本調査研究で提案し、試行した実験ショーの効果測定手法は、理解度を定量的に測ることができ、実験前の来館者の認識を把握することもできる。さらに感覚的な理解度と実際の理解度との差も見ることができ、実験ショーの改良や開発において有効な評価手法となりうると考えられる。

ただし、課題もある。この試行では標本数が少なかったこと、実験ショーの演者やショーを行う環境による差異がありうること、実験前クイズの影響が、実験ショーを見る際および実験後クイズに影響を与えてうることも考えなくてはならない。

今後は、さまざまな影響もファクターとして取り入れ、より有効なデータを取りながら、効果的な評価手法を考案していく。

サイエンスコモンズを利用した 博物館学新領域研究の提案

総合研究大学院大学 奥本 素子
東京藝術大学 嘉村 哲郎
共栄大学 平井 宏典

文部科学省は平成24年から、学芸員の資格取得に必要な博物館に関する科目を改正する方針を出している（文部科学省 2009）。改正科目の中には、博物館教育論、博物館情報・メディア論など、既存科目とこれまでにあまり取り扱われてこなかった新しい領域の科目が統合され、新科目が設置される予定である（表1）。

表1 博物館に関する科目の見直し（文部科学省 2009）

現 行		改善方策	
生涯学習概論	1 単位	生涯学習概論	2 単位
博物館概論	2 単位	博物館概論	2 単位
博物館経営論	1 単位	博物館経営論	2 単位
博物館資料論	2 単位	博物館資料論	2 単位
博物館情報論	1 単位		
		博物館情報・メディア論	2 単位
視聴覚教育メディア論	1 単位		
		博物館資料保存論	2 単位
		博物館展示論	2 単位
教育学概論	1 単位	博物館教育論	2 単位
博物館実習	3 単位	博物館実習	3 単位
廃 止		増設・新設	

上記のように博物館学の科目の増設、新設の裏には、現在の博物館学が博物館に関わる全ての事を対象とする領域の広い学問になったことがあげられる（Carbonell 2004）。そのため、博物館学を教える教員は、博物館学に対する専門的知識が必要だと言われている。しかし、現在の大学には圧倒的に少ないことが指摘されている（青木 2007）。又、博物館学は教育領域が情報領域に重なったり、経営領域が保存領域に重なっていたりと極めて学際的であり、学際的視点は博物館学において必要だと言われている（Schlereth 2004）。

国内における博物館学研究では新領域に関連する研究が盛んではあるが、これらの領域を体系化した基礎研究は少なく、各研究機関に博物館をテーマとした研究者がいるものの、個別に研究を遂行している状況である。しかし、新領域における博物館研究

では現在進行形で著しく情報が変化していることから、個々の研究者によるトップダウン方式で概念をまとめることが難しく、これを可能にするためには複合的領域を同時に取り組むことが必要であると考えられる。

そこで、本研究では情報通信技術を利用した各研究者の知やデータを共有するサイエンス・コモンズの仕組みを取り入れ（Wilbanks and Boyle 2006）、オンライン上で情報交換をできるシステム・モデルを学際的博物館学研究のあり方として提案する。

本研究で提案するのは、コンセプトマップという概念整理法を利用して、博物館学の概念整理を行う方法である。コンセプトマップとは、キーワード（ノード）とキーワード同士を結ぶリンクによって概念を整理する学習法で、概念の構造的理解を促進するために開発された学習方略（Novak and Gowin 1984）である。近年、コンセプトマップの手法は研究分野の概念整理においても効果的だとされている（Friedman 2008）。

本研究では、博物館研究者でテーマごとに博物館学版コンセプトマップ（CoMMS: Concept Map of Museum Studies）を作成するワークショップを開催し（図1）、日本各地の博物館学研究者に公開し、作成への意見を反映できる仕組みを設ける（図2）。



図1 複数の専門家と共同でCoMMSを作成する。



図2 研究会のHPで公開する。

参考文献

- 青木豊（2007）博物館法改正に伴う資質向上を目的とする学芸員養成に関する考察，博物館学雑誌，第33巻第1号，59-78
- Carbonell, B.M. (2004) Museum / Studies and the “Eccentric Space” of an Anthology, in the *Museum*

studies: an anthology of contexts, Malden, USA, Blackwelle Publishing,

文部科学省 (2006) 学芸員養成の充実方策について, Available at http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/gaiyou/1246188.htm (Accessed 2010/08/25)

Schlereth, T.J. (2004) Collecting Ideas and Artifacts: Common Problems of History Museum and History Text, in the *Museum studies: an anthology of contexts*, Malden, USA, Blackwelle Publishing,

Wilbanks, J./ Boyle, J. (2006) An Introduction to Science Commons, Available at http://sciencecommons.org/wp-content/uploads/ScienceCommons_Concept_Paper.pdf (Accessed 2010/08/25)

Friedman, A. (2008) Concept Mapping in Knowledge organization through a Semiotic Lens, Proceedings of the Third Conference on Concept Mapping. Helsinki, Finland, Available at <http://cmc.ihmc.us/cmc2008papers/cmc2008-p106.pdf>. (Accessed 2010/08/25)

Novak, J. D. & Gowin, D. B. (1984) Learning How to Learn. New York and Cambridge, UK: Cambridge University Press.

歴史的建造物を活用した博物館化に関する研究

—台湾台北撫台街洋樓を事例として—

常磐大学院人間科学研究科博士課程後期

邱 君妮

本研究は、歴史的建造物を活用した博物館化に関する研究である。台湾の事例として、台北市にある撫台街洋樓を取り上げる¹⁾。本事例研究の目的は二つある。一つ目は、歴史的建造物における博物館化の定義とは何かを探ることである。二つ目は、台湾の文化資産保存法に基づいて実施されている歴史的建造物の博物館化について検討することである。歴史的建造物の博物館化の定義、並びに台湾における歴史的建造物の博物館化の背景と事例研究を報告し、最後に結論を述べたい。

歴史的建造物における博物館化の定義

「博物館化」という言葉は、1980年代に Peter Vergo が新博物館学を提唱したのがきっかけとなり、それ以後使われるようになった。博物館化の定義には、



撫台街洋樓の正門で入館チケットの自動的販売機がある。

大きく分けると二つの種類がある。

一つ目は資料、モノの博物館化である。これは、今まで展示品として扱われていなかった資料・モノが博物館に入り、収蔵・研究・展示などの対象となることで、その資料・モノの歴史的価値・学術的価値・美的価値などが初めて見出される場合を指す。この一連の過程が、資料・モノの博物館化である。

二つ目は空間の博物館化である。これは、建物内部の空間が元々博物館ではないが、部分的あるいは全ての空間の機能が博物館のようになることをいう。例えば、本事例研究の撫台街洋樓は、元々は建築会社の材料を販売する店舗であった。それがまず台北市文化局によって修復され、その後、博物館の専門家によって、建物内部を展示室に変更するための計画が実行された。

すなわち、博物館化とは、従来博物館とは無縁であった建物が博物館として転用されるプロセスのことである。博物館の運営方法を駆使して、資料・モノと空間を取り扱う。



撫台街洋樓の内部写真1と2

(台北の昔上海の記憶をテーマとして行う特別展覧会)

空間の博物館化

空間の博物館化は、先の定義で述べたように元々建物内部の機能が博物館仕様ではないが、博物館の運営方式の導入によって博物館化される。空間の博物館化は、放置時間の有無に基づいて二つの分類方法がある。一つ目は、建物が使用されることなく放置されていた状態から、建物内部を修復（あるいは復元）した後、建物の空間は博物館の機能をもって生まれ変わるものである。これは再生ⁱⁱした博物館化といえることができる。二つ目は、建物が使用されずに放置される期間がなく、直接博物館として利用される場合である。こちらは転用ⁱⁱⁱした博物館化といえることができる。

また、空間の博物館化後の機能については、大きく二つのタイプに分けることができる。一つ目は、元々の空間の機能を残したまま、博物館の機能を加えるタイプである。二つ目は、元々の空間の機能を停止して、博物館の機能を加えるタイプである。たとえば、本事例研究の撫台街洋樓の博物館化は、建物が使用されることなく放置されていた状態から、修復した後、元々の空間の機能を停止して、博物館の機能を加えるタイプである。

台湾の歴史的建造物の博物館化の背景と過程

日本の文化財は、台湾では文化資産という。台湾の文化資産保存法には七つの分類があり、本研究の撫台街洋樓は分類一の「古蹟」（こせき）^{iv}と呼ばれているものに該当するが、便宜上、日本の有形文化財の種類にある「歴史的建造物」と述べることにする。

はじめに、この歴史的建造物の博物館化の背景を紹介したい。台湾における歴史的建造物の博物館化の背景と文化政策には、密接な関係がある。文化資産保存法を制定する以前の1977年に、アメリカの環境デザイナーであるローレンス・ハルプリン（Lawrence Halprin）は、台湾での講演の際に「歴史的建造物再利用の概念」を台湾に導入した。その概念は、馬以工先生の「古い屋の再循環使用」という文書で詳しく紹介された^v。そして、1982年に文化遺産保存法が制定されると、歴史的建造物の保存は、国の文化政策において最も重要な使命の一つとなった。これらの流れを受けて、行政院文化建設委員会^{vi}は、1998年から未使用空間が再利用されることを推進している。1990年代頃から、建築学教授傅朝卿氏によって、歴史的建造物の再利用の課題についての教育が推進され始めた。2000年の文化資産保存法の改正では、歴史的建造物の保護基準が「歴史的価値があ

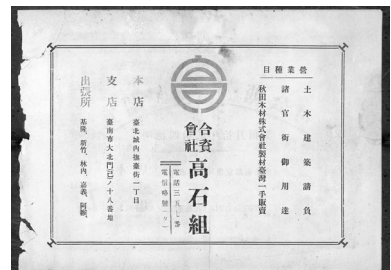
るか及び再利用が可能であるか」という二つの視点を重要視していることが分かる。この改正で歴史的建造物の保存プロジェクトは、再利用に焦点が当てられることになる。2001年、行政院文化建設委員会の「未使用空間再利用実施要点」の中の2番目に、未使用領域の定義が明確に成文化された^{vii}。この「未使用空間再利用実施要点」では、未使用空間が指定・登録される時に歴史の特性の度合いが重要視されていることが分かる。この時期は、再利用の研究が一番発展した時期でもある。また、行政院文化建設委員会は、2004年に「歴史的建造物保存維護再利用執行手冊」を出版した。この手冊（マニュアル）では、法律と調査研究、修復の三つの項目で歴史的建造物の登録制度や再利用などの実際の操作方法を詳しく説明している。

以上の文化政策の背景に基づいて、台湾の歴史的建造物を再利用した博物館化の過程には三つの段階がある。1）文化資産を保存する取り組みの指針や根拠となる文化政策の決定である。2）その文化政策によって、文化資産の保存と活性化の視点が組み合わされ、観光などの地域振興策へと繋がる。3）地域振興策を通して、元々博物館ではない歴史的建造物に博物館の機能を引き出すための経営策が取り入れられることにより、博物館化されることになる。

事例研究—台北市にある撫台街洋樓

撫台街洋樓という名前は、洋樓の位置にあり、台北市延平南路の旧称である撫台街に由来する。撫台街は、清朝の時代に中国や西洋からの商人が台北城に入る重要な道だった。1910年、日本人の高石忠愷によって建築会社の材料販売するために建物が建設された。現在、それは台北市内に残る唯一の日本殖民時代初期の洋式店舗となっている。

撫台街洋樓を再利用した博物館化には、以下の三つの要因がある。初めに、台北市文化局の考えでは、



1910年、新聞で建物落成を掲載した。

〈写真提供〉撫台街洋樓

撫台街洋樓の歴史的背景を通して、台北の歴史が広く認識されることを期待していた。建物の再利用を通して、展示機能をもった博物館化になる。撫台街洋樓は、台北の歴史を知ることのできる施設として機能している。一方で、撫台街洋樓は台北の旧ビジネス街にあり、現在はあまりにぎわっていない。従って、歴史的建造物を再利用した博物館化によって観光を起こし、地域振興を期待することができる。最後は、撫台街洋樓での活動と展覧会によって、人々が文化遺産の価値を理解でき、歴史的建造物の発信地になることが期待される。

撫台街洋樓の博物館化の分析について、ここでは4つの分類で説明する。1) 資料は、この歴史的建物と関連がある資料の収集、コレクション、展示を通して、撫台街洋樓の歴史的価値、学術的価値や美的価値を確認できる。2) 空間は、既存の店舗空間機能が停止され、博物館の展示・教育の機能をもつようになる。3) コミュニケーション（教育方法）



建築スタイルはヨーロッパ式で、1階は石造りで、美しい石柱のアーケードがある。
〈写真提供〉撫台街洋樓



2階と屋根は木造となっている、屋根は典型的なヨーロッパスタイルのマンサード屋根造りである。

〈写真提供〉撫台街洋樓

は、博物館型の参加体験を提供する。たとえば、台北の歴史の講座などである。4) 経営は「委外経営」を採用する。文化資産保存法の施行細則第10条によって、民間管理に契約を委託して、博物館の運営方式を導入する。現在、台湾の各縣市では、歴史的建造物を再利用する最も一般的な経営方式は、撫台街洋樓と同じ「委外経営」の方式である^{vii}。

結論

歴史的建造物における博物館化の定義は、従来博物館の展示物として認識されることのなかった資料やモノ、あるいは博物館施設として認識されることのなかった空間に対し、博物館の経営方式を採用することで、博物館施設へと導くプロセスのことである。非博物館機能を有した建物を戦略的に再生または転用して、観光や地域振興、歴史教育等の目的で利用される。

上記の事例研究から、歴史的建造物を再利用した博物館化には、空間の再利用と空間の保存について、二つの概念が必要であることが分かる。一つは、教育・研究をはじめとする博物館のミッションや機能、経営方式が導入されることである。もう一つは、集客効果に基づく地域経済の活性化及び地域文化資本の効果的な活用が期待できることである。

*参考文献

- Zbynek Z. Stransky, *Museology for Tomorrow's World*, p59-64 (1997)
- Zbynek Z. Stransky, *Introduction to the study of museology*, p28-29 (1995)
- Peter Vergo ed, *New Museology* (1989)
- 楊惠亘 西村幸夫、台北市文化局所有歴史的建造物の再利用事例に見る空間と運営の評価、p105～106 (2007)
- 王幸琪、歴史空間再利用為博物館情境—梅洛龐蒂 (Merleau-Ponty) 知覚現象學出發以基國派老教堂文化館為例、p11-13 & p28-35 (2005)
- 林華苑、古蹟保存政策與再利用策略之研究、p9-25 (2001)
- 土肥博至 環境デザイン用語辞典、p121 & 219
- 林君成、文化資産研究実務、p1-16～1-25 (2009)

*注

- i 撫台街洋樓 <http://blog.roodo.com/futai>
- ii 再生 (regeneration, renovation) 古くなったものを新しく作り直すことが原意。ここでは、建築や都市において、古くなって時代に合わなくなった機能や設備を改修し、使い続けられるようにすること。
- iii 異なった用途として使用し直すこと、本来の目的

とは違った用途にあてることが原意。建築・都市分野では、ある建物や土地利用が当初計画されたものとは異なった用途で、新たに使用された施設や土地のことを指す。

- iv 台湾文化資産保存法の第3条第2款
<http://www.cca.gov.tw/law.do?method=find&id=30>
- v 台南地方法院再利用
<http://museum.lawbank.com.tw/say.asp>
- vi 台湾の行政院行政院文化建設委員会（C.C.A.）は中央政府管理文化芸術の事務の部門、中央と地方の文化芸術の発展に対して、リーダーシップの地位である。
- vii 未使用空間再利用政策における
<http://www.npf.org.tw/post/2/4332>

伊賀地域における 新しい文化産業振興政策

—エコミュージアム・ 新芭蕉博物館構想（一つの試論）—

神戸学院大学経済学部教授
（フィランソロピー研究フォーラム神戸学院大学代表）

高島 博

(A) 芭蕉翁記念会新構想について

世界の詩聖、芭蕉翁だけでなく観阿彌・世阿彌親子が生まれ、能楽創座の地でもある伊賀は、文化芸術産業づくりの文化創造センターとして、世界にIGAブランドを発信していける可能性をもっている。

文化は「経済効果」を生み、かつ文化と経済を結ぶ「文化産業」としての博物館には、「地域創造」に貢献する役割が与えられている。⇒体験し、感じる「新しい」博物館の構想

【提案】キーコンセプト：「芭蕉さんの夢（は）、はるかに世界をかけめぐるア・ミュージアム（アミューズメントミュージアム）」

- その意図するものは、江戸時代、翁は上野で亡くなる年までふところに入れられた『奥の細道』原本を赤坂の兄のもとにあずけて、大阪に向け出発。その年の10月12日、翁は最期に「旅に病んで 夢は枯れ野を かけめぐる」という句を

のこし、弟子たちに惜しまれ世を去った。

しかし、芭蕉さんの夢は、のち向井去来らの多くの芭蕉を慕う人々によって、世界の果てまでも、不易流行の老荘思想をつうじて、私たちの心の中に生きている（川崎克著『芭蕉は生きている』）。このことを忘れてはならない。
 （高島博著『文化による地域づくり ―一つの文化経済的アプローチ―』晃洋書房、2008年10月、第5章並びにあとがき参照。）

- (B) 1998－99年「伊賀地域における地域づくりの文化経済学的研究会」山田浩之京大名誉教授の下で私を含む4名のメンバーで、調査研究があった。

当研究会は、新しい研究分野である「文化経済学」の立場から、文化による地域づくりのあり方を研究してきた。98年11月には英国を視察訪問し、シェイクスピア生地ストラットフォード・アポン・エイボンと交流を深め、地域づくりに関する情報交換を行った。

- 98年11月、英国ストラットフォード・アポン・エイボンとの交流に関する手紙を持参。
- ①シェイクスピアの母校、King Edward VI世スクールと創立100年をむかえた県立上野高校との交流も、99年秋に実現し現在に至る（11年目）。
- ②99年10月13日（芭蕉祭の翌日）地域づくり国際シンポジウムを開催し、お互いの国で両者の知性を語り合った。
- ウォリッシュ博士、シェイクスピア博物館長（当時）は、シェイクスピアの生き方、考え方について学んで、町づくり、地域づくりに生かすことを語っていた。（最終報告書が市役所にあり）（JMMA会報No.54 2009年12月発行、P.14～P.17参照）

- (C) 99年から8年の後、2007年に今岡市長（当時）の依頼で、英国ヨーク大学、英国ストラットフォード・アポン・エイボン（シェイクスピア、パースプレイストラスト）を訪問し、オーエン理事長に代わるドクター・N・ウォルトン（エグゼクティブ・セクレタリー）に会い、中世の野外劇場「スワン座」の再建を知る。
 →今後の町の「文化による町づくり」元年とのこと。

◎ストラットフォード・アポン・エイボンの「SWAN座」は、町の観光シンボル。⇒町の文化を生かすこと。

◎伊賀は、観世能の発祥地。こち氏の薪能は藤堂藩お抱えの喜多（キタ）流である。

◎古くから、伊賀は古典芸能、芸術（げいじゅつ）の国。

◎芭蕉は伊賀の芸術の環境の中で生まれた。⇒ノーベル賞候補者であった西脇順三郎氏は、著書『芭蕉、シェイクスピア、エリオット』の中で、「これは私の私見であるが」「芭蕉さんの夢は開花する」との説を中心に、能舞台とSWAN座を同じものと見なすことができるとの論を展開している・・・ととらえることもできるのではないだろうか？

IGAの世界ブランド：伊賀における新文化産業を作り上げ、経営力を増すことが大切である。



最後に本報告は、IGAブランドを世界に通用する文化産業としての生活環境博物館を伊賀上野桃青の丘に実現することを目的にする（新井重三編『エコミュージアム入門 ―21世紀のまちおこし―』牧野出版 1995年）。

本研究の意義は次の通りである。1つ目は（財）芭蕉翁顕彰会は、2011年6月に申請する新公益法人法による税制優遇措置の適用を受けること、もう1つは、芭蕉翁記念館は文部科学省の博物館法の適用を受けることを意図するものである。

また、2011年藤堂高虎公築城400年の文化のよるまちづくり並びに三重県の2011～2014年の「うまし国三重」のイベントに協賛するためのものである。

次世代型博物館モデル『モバイルミュージアム』の有効性の検証

—北京清華大学における

観覧者調査の結果から—

政策研究大学院大学政策研究科/
日本学術振興会特別研究員（DC2）/
東京大学総合研究博物館研究事業協力者

寺田 鮎美

1. はじめに

東京大学総合研究博物館では、2006年より、所蔵する学術標本やミュージアム・コンテンツをユニット化し、都市や生活空間などの博物館の外に文脈を変えて分散配置する「モバイルミュージアム」プロジェクトに取り組んでいる⁽¹⁾。従来の博物館は収集方針に基づいた資料の収集保管を活動の核とし、またそれらを陳列展示する場所を内部に備えることを常識とする「巨大集中型」博物館を志向してきたと言えよう。これに対し、博物館収蔵品を展示ケースに入れて博物館の外へと持ち出し、分散配置するという、従来とは逆の流れを生み出す「分散遊動型」博物館という形態が考えられる。東京大学総合研究博物館のモバイルミュージアムでは、展示ケース一つを最小単位の博物館とする実験展示を、産学連携プロジェクトによる次世代型博物館モデルに関する研究活動として実践している。2010年7月8日時点で、実現プロジェクトは、国内外で38を数えている。本研究では、それらのうち、海外における一つの典型的な事例となる北京清華大学の事例を取り上げ、モバイルミュージアムの有効性の検証を試みた。

2. 清華大学におけるモバイルミュージアムの概要⁽²⁾

モバイルミュージアムは、実施目的、展示場所、パートナー等の個々のプロジェクトの条件に応じて、展示方法や内容の調整を行うことが必須となる。清華大学の事例では、実施目的は1）非博物館空間を博物館化させるというモバイルミュージアムのコンセプトに基づく海外事例の実現、2）東京大学と清華大学の国際学術交流協定に基づくイベント「清華大学における東京大学ウィーク」における東京大学紹介の一つのプログラム提供の2点であった。実施体制は、展示の企画および運営が東京大学総合研究博物館、連携および協力機関が東京大学本部と清華大学である。

本事例の特徴としては、次の4点が挙げられる。

1) 東京大学の紹介と研究紹介を展示構成に組み込む、2) 研究紹介の一つの例示として、本館で行われた「異星の踏査」展の既存のコンテンツを活用する、3) 20メートル四方の仮設テントを設置し、展示会場とする、4) 観覧者のターゲットを清華大学の学生とすることである。展示構成は、第1パートが東京大学の紹介、第2パートが研究成果の公開をテーマとした過去の展覧会資料による東京大学の研究紹介、第3パートが「異星の踏査」展清華大学バージョンとなった(図1)。



図1 清華大学におけるモバイルミュージアム外観

3. 調査の概要および結果

モバイルミュージアムの有効性の検証を目的に、観覧者を対象に行ったアンケート調査は、展示会場であるテントの出口にて、2008年5月15-16日の2日間にわたり実施された。方式は、選択式の質問票への自記入式とした。調査項目は、1) 回答者の属性、2) 来場状況、3) 展示の満足度の3項目とし、それぞれに具体的な質問を設定した。

各項目に関する調査結果は、以下のようにまとめられる(図2-4)。1) 回答者属性：本プロジェクトがターゲットとする観覧者である清華大学の学生を、専門分野の漏れがなく幅広く獲得できていた、2) 来場状況：仮設テントという非博物館空間を博物館化したモバイルミュージアムの展示形式が人を惹きつけ、普段あまり博物館に行かない人にアクセスの機会を与えていた、3) 展示の満足度：今回の展示が「楽しんだ」、「役に立った」という点から、おおむね来場者を満足させていたことが確認された。

■ 回答者属性

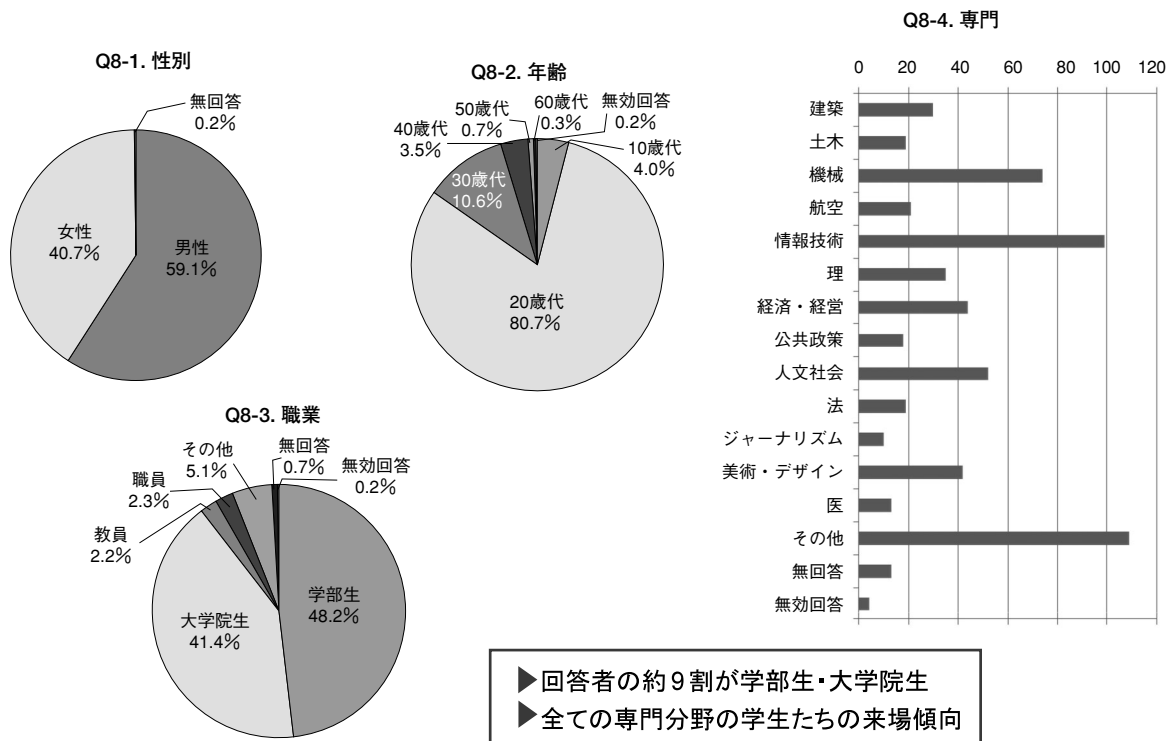


図2 調査結果の概要(回答者属性)

■ 来場状況

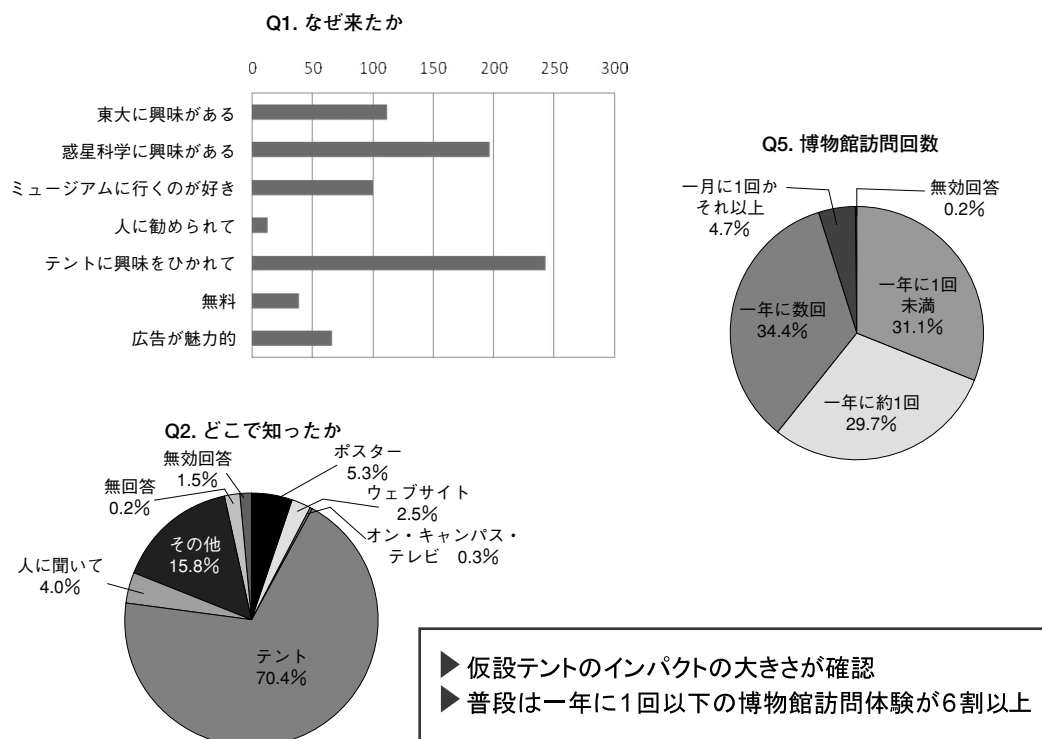


図3 調査結果の概要（来場状況）

■ 展示の満足度

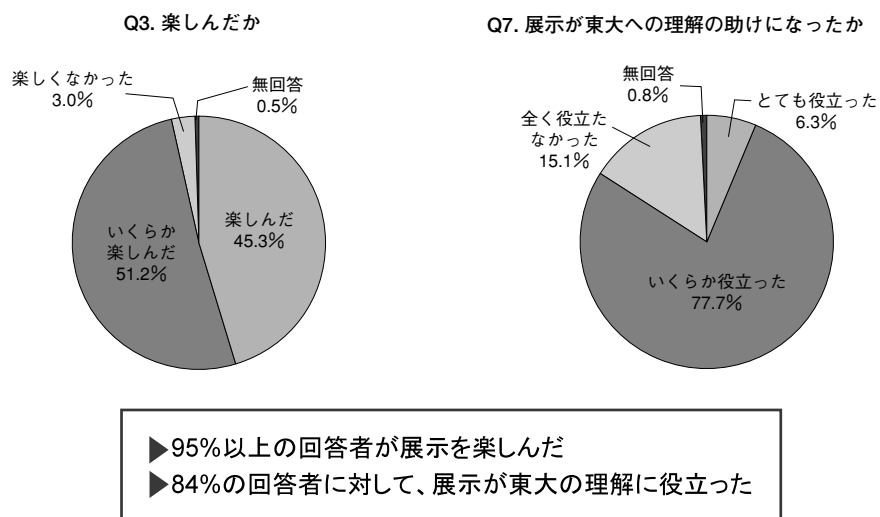


図4 調査結果の概要（展示の満足度）

4. 今後の展望および課題

以上のように、本事例からはモバイルミュージアムの有効性が示唆されたと考えられる。したがって、今後の展望としては、コンセプトに沿ったプロジェクトのさらなる展開が期待される。本プロジェクト

が行われた中国では、近年、国策として博物館建設が急ピッチで進められ、アクセス拡大のための博物館の無料開放政策も打ち出されている⁽³⁾。しかしながら、人口当たりの博物館数は先進国に比べまだまだ少なく、農村部と都市部の整備格差の問題を抱えてい

る。このようにモバイルミュージアムの展開は、博物館新興国の中国の状況に照らしても、その効果が期待されるモデルとなりうると言えるだろう。

一方、課題としては、モバイルミュージアムの構造的な問題点による限界が指摘される。ミュージアム・コンテンツを博物館の外に持ち出すことには必ず制約があるため、ものの性質、展示場所や輸送の条件を考慮し、博物館の保存機能とのバランスを図っていくことが必要となる。さらに、モバイルミュージアムは産学、産博連携や他機関との連携が必須となる。実施体制の安定化のためのネットワーク構築は、個別の博物館だけではなく、博物館政策という大きな枠組みでの課題としても指摘されるだろう。

謝辞

本調査の実施にあたっては、東京大学総合研究博物館の西野嘉章教授、宮本英昭准教授、東京大学理学系研究科修士課程（当時）竹内洋人氏および山口優夢氏他、関係スタッフの皆様にご多大なるご協力をいただいた。ここに改めて感謝申し上げる。

註

- (1) モバイルミュージアムのコンセプトについては、西野嘉章「巨大集中型のミュージアムから分散携帯型のミュージアムへ——博物館存在様態のパラダイム変換を図るべく投金された産学連携プロジェクト『モバイルミュージアム』」、<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/mobilemuseum/concept.html>（2010年8月5日最終確認）を参照。
- (2) 清華大学におけるモバイルミュージアムについては、宮本英昭・洪恒夫・関岡裕之・橘省吾・寺田鮎美「海外モバイルミュージアムMM010CN：異星の踏査 at 清華大学」、『ウロボロス 東京大学総合研究博物館ニュース』第35号、平成20（2008）年12月、2-3頁を参照。
- (3) 中国の博物館の現状については、岡村志嘉子「中国における博物館の現状」、財団法人日本博物館協会編『博物館支援策にかかる各国等比較調査研究——アジア9カ国国際比較調査報告書』（平成19年度文部科学省委託事業 地域と共に歩む博物館育成事業）、財団法人日本博物館協会、平成20（2008）年、35-38頁等を参照。

つ か い か た 京都大学総合博物館の取扱説明書

—学術映像博2009にみる

ミュージアム・リテラシー—

京都大学総合博物館/

京都大学研究資源アーカイブ

山下 俊介

アクティブKEI 伊藤 恵

1. はじめに

京都大学では2009年に学術映像3企画（学術映像博2009、学術映像コンペティション、第13回京都大学国際シンポジウム「学術研究における映像実践の最前線」）を企画・実施した¹⁾。

その中で京都大学総合博物館秋季企画展「学術映像博2009」（2009年8月5日～12月13日）（以下、「学術映像博」と略す。）の実施報告を行うとともに、ミュージアム・リテラシーの切り口から、その企画実践を検証し、博物館活用の新しい姿をさぐってみたい。

2. 学術映像博とは？

学術映像博のはじまりは、若手研究者グループが中心となって、学術領域における映像（学術映像そのもの）の展示と、映像実践行為（研究者の映像へのかかわり）の展示、とを企図したことであった。紆余曲折を経て総合博物館秋季企画展として学術映像博の実施がきまったのは、開催の4か月前であった。

学術映像博の趣旨は“学内、関係する諸機関、研究者のネットワークを通じて、学術領域に関係する映像を収集・展示し、「学術映像とは何か？」を来館者とともに考える”とした。

展覧会では、一次資料としての映像資料や分析に供される映像、科学データの可視化映像、研究プロジェクトのアウトリーチ的映像といったさまざまな性質をもつ映像、また、天文学から動物行動学、民俗学、医学など多岐にわたる分野の映像と映像実践行為を、「のこす（記録）・よみとる（分析）・あらわす（表現）」という基本類型サインのもとに上映・展示した。

展示の工夫としては、映像を視聴する際の時間拘束性から来館者を解放し、学術映像の多様さを一望可能にするため、④上映スペース、⑤展示スペースを分けて設けた。

④上映スペースでは、午前は常設プログラム、午後には週毎に変わる特集テーマプログラムの上映を設定し、特集プログラムについては担当グループの

企画のもとに実施したⁱⁱ⁾。上映される映像を来館者が受動的に鑑賞するという、上映と鑑賞者の一方方向性を打開するため、毎週末には特集テーマを中心としたトークイベント・ワークショップを必ず実施し、映像背景への理解を促すとともに、特集テーマ関係者と来館者との議論の場を創出することを試みた。

4か月半の間に、19の担当グループによる⑥展示スペースの展示替えを3回、④上映スペースでは毎週異なる特集上映、37回のトークイベント・ワークショップを実施することは大変であったが、学術映像の豊かさとその可能性を展示するというねらいは、リピーターの存在やアンケートを見るとおおむね達成できたのではないかと考えている。

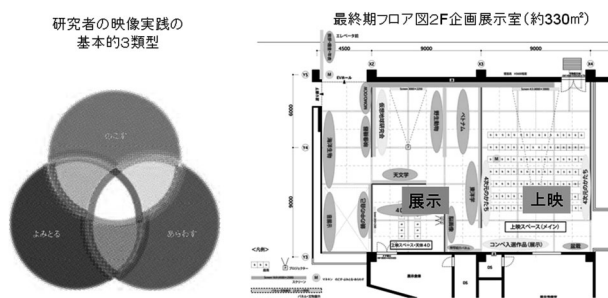


図1：映像実践行為の基本類型サインと学術映像博2009の構成

3. 学術映像博にみるミュージアム・リテラシー

(1) 学術映像博の「利用者」とは

長期間、かつ広範な分野で構成される展示会を可能にしたのは、学内外からのさまざまな参加者の存在にあった。これまで京都大学総合博物館では、大学内部局との連携の元に企画展を実施してきたが、今回は、学内外の研究者、個人やグループの積極的な参加という点に注目できる。映像の身近さ・親しみやすさというメディア特性とともに、「学術映像」という対象がまだ確立されていないため、多くのジャンルの人が参加でき、展示および博物館活動へのかかわりの間口を大きく開くことができた、と考えられる。

京都大学総合博物館の観覧者（展示における利用者）とは、基本的には学生、一般の市民であり、所蔵品観覧や学内研究成果の一方的な発信／受容といった固定化された関係で結ばれてきた部分が多い。学術映像博においては、さまざまな特集・展示・ワークショップ担当のグループが、学術映像博という場を自由に使いながら、観覧者の学生・市民、あるいは別の担当グループと相互に発見・情報・知識を交換した。つまり、発信者が、ある局面では別の

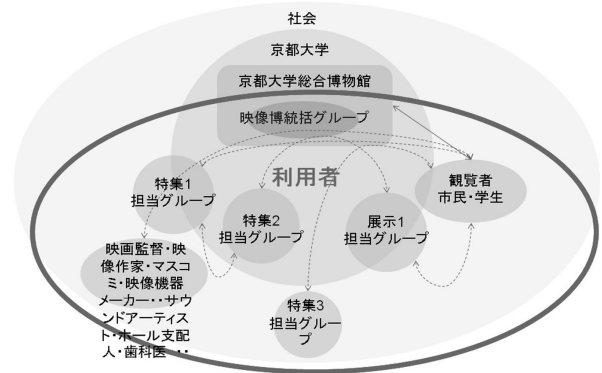


図2：学術映像博における博物館利用者

グループの受容者となったり、受容者がトークイベントでの発信者となるなど、固定化されない関係が産みだされたのである。地域研究を専門とする複数のグループが、調査地域の人々を巻き込んで、合同特集イベントを担当し、映像比較をきっかけとした共同比較研究の萌芽をそこにみることもできた。また、専門分野のプロジェクト報告書に映像博での担当展示を研究成果の発信として記載するグループもあった。映画監督や映像作家、サウンドアーティスト、劇場マネージャー、文化プロデューサーといった職業的バックボーンを持つ人々が、企画の新規性に賛同し、映像博に協力・参加、あるいはまた活用したことも注目に値するのではないだろうか。

従来の利用者に対して、学術映像博企画を発案した統括グループまで含めての広い範囲の関与者こそ、“拡張された利用者層”として捉える事が可能であり、またこのことは博物館活動において今後重要な視点だと考える。

(2) ミュージアム・リテラシーからみる

ここでは、さまざまに用いられるミュージアム・リテラシー概念の中で、“博物館を利用/活用する意図を持った人、また、各個人々に属し、成長するもの、その人”をPerson with Museum Literacy (PML)として仮定し、前節で述べた“拡張された利用者”個人に焦点を絞って探ってみたい。

学術映像博の制作が短期間で可能となったのは、各担当グループのキーパーソンが、以前から博物館にゆるやかに集っていたことが理由のひとつであると考えられるが、それはなぜだろうか。総合博物館では、博物館業務としてはオフィシャルではない、セミクローズドな集まりが不定期に催されてきた。そのひとつに、業務終了後の博物館ロビーに場を設け、学内外の種々の専門家に話題提供を依頼し、人づてで集った参加者が、フランクな雰囲気の中でさ

まざまに交歓する、という会がある。参加者は、アーティスト・医師・作家、評論家・囃家・商店主などさまざまである。博物館運営側である主催者は、収蔵物等の保管のため、業務外で不特定多数に館をひらくにはリスクがあるが、知人やその知人といった関係性を担保された「セミ・クローズドな場」によってそのリスクを回避できる。一方の参加者は、非日常の博物館空間において、知的好奇心や遊び心を刺激され、新しい発見や認識を働かせることが出来る。こういった場において、参加者個々人が自発的に博物館との関わりを模索する雰囲気が生まれてくるのは、自然なことであろう。

このような効果を主催者が意図して実施したものではないが、継続的な実施により、参加者がPMLを醸成する場として機能してきたといえる。映像博各担当グループの複数のキーパーソンもこれらの会の参加者であり、模索していた博物館との関わり方を、学術映像博を契機に実行に移した、と考えられる。

このような会に限らず、博物館の「オフィシャルではない場」「セミクローズドな場」という隠された機能は、ミュージアム・リテラシーの醸成に積極的に活用できると考える。

(3) トークイベントにみるミュージアム・リテラシー

次に、学術映像博実施中のミュージアム・リテラシーについて、特集テーマ等と関連して実施されたトークイベントの局面をみってみる。開期中に37回実施されたトークイベントにおいては、観覧者も含めた空間の活況に差がみられた。乱暴ではあるが、これをトークイベントの成功／不成功の基準として、その要因を二つ挙げる。

一つ目は、イベントのオーガナイザー／スピーカーとしての個人の経験的能力に帰せられるものである。トークイベントを活況に導くには、実施日、時間帯、宣伝、話題、観覧者層の想定、観覧者の反応、コミュニケーション、といった複合的な要素を総合して実施しなければならない。博物館を利用しようとする者（PML）には、博物館活動そのものへの経験的理解が必要になるということになる。

二つ目は、トークイベントの構造の把握によるものである。トークイベントに複数のスピーカーが存在する場合、オーガナイザーであるPMLは、個々のスピーカーと空間の反応にも注意する必要がある。博物館を活用する意図という点では、他のPMLと同じであるが、それぞれのPMLがその意図を発揮できるような空間の必要性を把握し、作りだすことが、

■トークイベントの成功/不成功を決めるもの (観覧者を含んだ空間の活況を基準に)

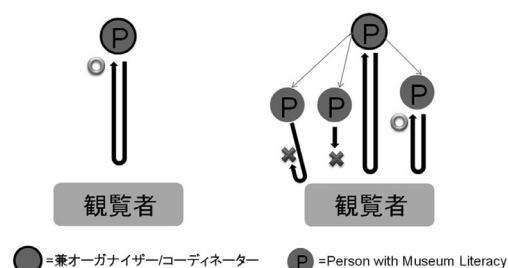


図3：トークイベントにみるミュージアム・リテラシー

オーガナイズするPMLには求められることとなる。つまり、個人で完結するようなミュージアム・リテラシーとは必要とされるミュージアム・リテラシーの位相（ミュージアム・リテラシーの階層）が異なるといえよう。

これらの「博物館を活用する力」であるミュージアム・リテラシーの蓄積と共有化、およびこのようなPMLの活動システムの構築については、博物館運営側とPML双方による協働の必要がある。映像博では、全担当者に対するメーリングリストによって特集やイベント実施の経験の蓄積を試みたが、オンライン上のフォーラムを立ち上げるなど、より意識的な共有化が必要であったと考える。

4. 階層的ミュージアム・リテラシー

前章末で述べた階層的なミュージアム・リテラシーと、既に各所で指摘されてきた運営側・利用側両面でのミュージアム・リテラシー検討の視点とをあわせて考えてみる。

利用側のミュージアム・リテラシーは、博物館の観覧利用という一般的段階から、館への評価や意見を行う段階、博物館での企画を構想する段階、企画を実施し博物館を実際に利用する段階、などが想定できる。更に進むと、来館者のミュージアム・リテラシーや各Person with Museum Literacyの階層を見積もった上で博物館における企画を実施したり、PML

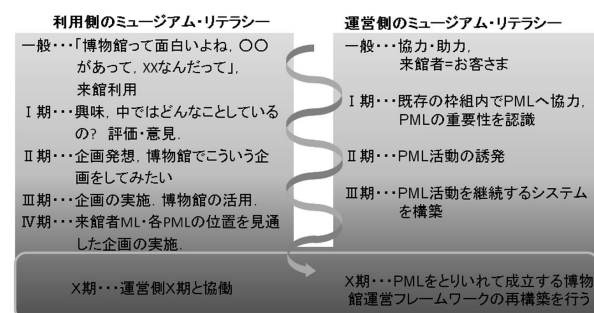


図4：利用側／運営側のミュージアム・リテラシーの階層モデル

活動をとりいれた博物館活動フレームワークを、運営側と協働して考案する段階などが考えられる。

一方、運営側のミュージアム・リテラシーについては、「来館者＝お客様」とみなす一般的段階から、既存業務内でPMLへ協力、あるいはその活動の重要性を認識し、活動の誘発を行う段階、更にその先には、PML活動の継続的なシステムの開発の段階、そして利用側のミュージアム・リテラシーと同じく、PML活動をとりいれて成立する博物館運営フレームワークをおこなう段階、に達し、両者のミュージアム・リテラシーが協働することが可能になる、と考えられる。以上のような各段階は、あくまで仮定したものであるが、トークイベントにおけるミュージアム・リテラシーでみたように、上位層が下位層のミュージアム・リテラシーを包含する形で成立するという階層性、また望まれるミュージアム・リテラシーというものが“よりよい博物館を指向し、機能するもの”だということを考えるならば、利用側と運営側のミュージアム・リテラシーは、最終的には極めて近いものとなる可能性がある。

5. おわりに

ミュージアム・リテラシーを段階的に引き上げていくことで、博物館の利用側と運営側双方の目指す博物館がつくられていくことが望まれる。しかし、双方のミュージアム・リテラシーが高位で協働し、結果両者の境界があいまいになる前に、博物館の主体がどこにあるのかという問題を検討しておく必要がある。博物館を使って文化・学術・社会、人類の為に資するという理念に立ち戻りつつ、個々の博物館の独自性に根差した運営方針・マニフェストを策定するべきであろう。学術映像博で発揮されたミュージアム・リテラシーの仕組みを、より一般化し、さまざまな博物館のさまざまな活動局面に適用できるよう、引き続き実践と検討に取り組んでいきたい。

註

- i) 3企画の詳細については下記WEBサイトを参照されたい。

学術映像博2009；

<http://inet.museum.kyoto-u.ac.jp/expo/index.html>

学術映像コンペティション；

http://inet.museum.kyoto-u.ac.jp/japanese/event/competition_jp/

国際シンポジウム「学術研究における映像実践の最前線」；

<http://gaia.net.cias.kyoto-u.ac.jp/visual-media.practices/>

- ii) 学術映像博では17の特集を実施した。また、最後の特集として、学術映像コンペティションの選考作品上映と制作者を交えた受賞映像鑑賞会を行った。

重要文化財「弘道館」来館者調査と弘道館デジタルマップ制作

常磐大学大学院コミュニティ振興学研究科

大松 美香

本研究は、2006年から行っている『重要文化財弘道館デジタル・アーカイブプロジェクト』の一環で2008～2009年に行った「弘道館来館者調査」と来館者調査の結果を踏まえて2010年に制作した「弘道館デジタルマップ」について報告する。

本題に入る前に、今回の発表のキーワードとなる「弘道館」について説明する。弘道館とは、徳川幕府の御三家である水戸徳川家第9代藩主徳川斉昭公が1841年、水戸藩士の教育及び、水戸藩の家風、意義を示すものとして創設した日本一の広さを誇る藩校である。次世代を担う人材の育成に重要な役割を果たし、その教育方針から幕末の尊王派の本拠地として、世間に影響を与えた。そして現在では、国特別史跡・重要文化財として、また周辺の歴史遺産を含んだ都市公園として広く一般公開され、当時の歴史的な文化財、書物等を現在に伝えている。

では本題に入る。『重要文化財 弘道館デジタル・アーカイブプロジェクト』とは、常磐大学コミュニティ振興学部コミュニティ文化学科の水嶋研究室が2006年から行っているプロジェクトである。歴史的・学術的価値の高い弘道館の建物や所蔵資料を「保存」と「活用」の観点から、写真や動画に記録して、デジタルアーカイブし半永久的に保存すると同時に、インターネット上に公開することによって、社会に開かれた文化的資産とする事を目的としている。また、ミュージアムマネジメントの学問的知見を活かし、地域と密接に連携してその活用化推進を図る事も目的としている。

2006年のプロジェクト始動とともに、弘道館の内部・外部の撮影（写真1）、水戸拓と呼ばれる拓本の撮影、展示されている肖像画のスキャン、弘道館室内の温湿度調査など、資料の保存環境データの収集を行った。また、撮りためた写真データをもとに、



写真1：弘道館内部撮影の様子

水戸京成百貨店、JR水戸駅等での写真展の開催や、Webサイトの公開など様々な面に活用し、弘道館の紹介を行ってきた。

そして2008年から、『弘道館来館者調査』を行った。水戸市内における弘道館の認知度を調査すると共に、博物館学の観点から弘道館を一種のミュージアムと捉え、人々がどういった目的で、どういったルートを辿るかを来館者調査し、人々がどういった展示物により関心があるのかを調べた。

調査方法は、ゼミナールに所属する4人が、2人1組となり、滞在時間を計る係りと、見学ルートを記入する係りに分れる。そして、弘道館の内部の構造を記した図面に、弘道館内全体の滞在時間、歩行距離、各部屋での滞在時間、展示物の注視時間を書き込む。調査対象者は無差別に選別し、対象者の歩く後ろを同じように辿りながら行う。対象者が来館を終えた時に、アンケートに答えてもらい、終了後に記入した内容をもとにカウントメジャーで全体の距離を測る。



写真2：来館者調査の様子

2008年5月～2009年3月までに1か月に一度のペースで調査を行ったが、この集計結果を以下に述べる。

図1は弘道館内部の平面図である。実線と点線で表しているのが典型的な歩き方である。

各部屋で足を止める時間・滞在時間の平均を104組から算出した。正席の間では1分48秒、湯殿及び便所では42秒、至善堂では2分48秒、中央番頭詰所では1分27秒、展示室では6分という平均を割り出すことができた。

全体における平均歩行距離は約236.9m、平均滞在時間が約24分ということが判明した。この数値は水戸の歴史ある文化財であり、国の特別史跡である弘道館の魅力を見て、知ってもらう時間としてはあまりにも少ない。よって、弘道館を隅々まで見学できるよう、弘道館内の順路案内をより詳細なものにするべきと考える。また、弘道館内にはいくつかの展示パネルがあるが、じっくりと立ち止まって見る来館者は少ない。しかし、弘道館にはボタンを押すと解説が流れる部屋があるが、その部屋だとじっくりと耳を傾ける傾向が多かった。このことから音声による展示解説機器を用意するなどして、展示解説の工夫に力を入れることを提案する。また、弘道館の建物の外にも多くの種類の梅や討試場、門構え、井戸などの見学すべき箇所がいくつかある。そちらにも目を向けてもらえるように動線を組むことによって来館者の滞在時間の増加が見込めるだろう。

アンケート調査の結果では、割合で表すと全体のうち、74%が茨城県外からの来館者であった。これに対し、水戸市内の来館者は9%である。そして、10～20代の若い人達の入館が全体の割合のうち、15%にも満たなかった事が判明した。これは、水戸市が水戸市民、特に若い世代に対して弘道館の魅力を伝えきれていない結果だと考えた。

この来館者調査の結果を踏まえて、より弘道館を知ってもらうために2009～2010年にかけて制作したのが、QRコード付き『弘道館デジタルマップ』である。デジタルとネットワークを通して過去の姿を現代に伝えること、さらには携帯電話で読み取れるQRコードの添付によって、中学生や高校生などの若い世代にも手にとってもらうことを目的とした。これにより、多くの世代に弘道館を始めとした水戸市の歴史と文化を広く伝え、郷土愛を育み、後世に伝えることの大切さを学んでいただけたと考えたからである。また常磐大学内の機関で、地域社会への貢献を目的としている「地域連携センター」と提携し、“持続可能性社会に向けた地域の環境づくり活動資金”として常陽銀行に援助をいただきながら、地域

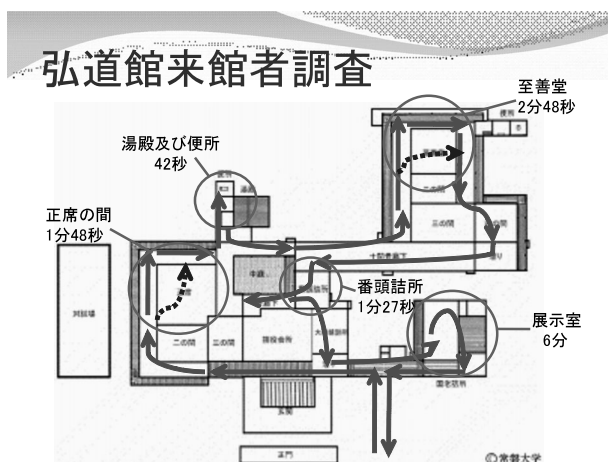


図1：弘道館内平面図と来館者調査結果

との連携も重視し活動に努めることも目的とした。

弘道館デジタルマップは2009年11月から制作を始めた。まず、マップやホームページ（以下：HP）で使用する弘道館の画像収集を行った。先輩方が撮り溜めていた画像や、新たに撮影した写真データの中から、弘道館内部11枚、外部10枚の写真を選定し、HPやマップに使用した。次に『弘道館案内HP』の制作を行った。携帯電話で読み取る事ができるQRコードを作るためには、インターネットWebサイトが必要であるため、HPを制作した。HP制作ソフトを使用し、2009年12月から編集を始めた。デザインはシンプルで、誰が見ても分かり易いHPを制作した。そして、HP完成後にQRコードの制作を行った。QRコードは、無料制作サイトを使用した。制作サイトにアクセスし、作成したいページのURLを挿入するだけで、自動でQRコードを作成することができる。本プロジェクトで制作したQRコードは弘道館内部11点、外部10点である。最後に、マップの表紙・地図デザイン制作をした。表紙デザインは、ゼミナール生全員で考え、弘道館の絵画画像を使用し、弘道館の雰囲気が伝わるようにした。また、メインとなる地図は、来館者調査でも使用した平面図を参考にし、画像編集ソフトを使い編集をした。その後、印刷会社に写真・表紙・マップ・QRコードのデータを提出し、2010年2月に弘道館デジタルマップが完成した。

弘道館デジタルマップはA4判8ページである。利用者は、このQRコードを携帯電話で読み取ると、部屋の名称とその画像データ及び説明文の情報を手に入れることができる。

また、携帯電話を持っていない来館者にも使っていただけるように、写真と簡単な説明文があるペー

ジも制作した。

デジタルマップの完成後には、弘道館や水戸市内7ヶ所の観光案内所で2,000部が配布された。また、NHK水戸放送局や新聞社にこのデジタルマップが紹介された。さらに、2010年5月17～19日まで台湾の国立台北教育大学で開催された「THE MUSEUM 2010」国際学術会議に参加して、弘道館デジタルマップについて発表し、日本だけでなく海外の方々からも高い評価を得た。

弘道館デジタルマップの課題として、HPに接続した時、パソコンからでも携帯電話からでも閲覧できるように、画像の大きさやデータ容量に注意したものの、地図上のQRコードを携帯電話で読み込む際に、機種によっては画像が表示されなかったり、読み込み時間が長かったりといくつかの問題が出てきた。これらを改善するために、問題点の洗い出しとさらなる専門知識を身に付ける必要があるだろう。

そして今後は、弘道館デジタルマップが実際にどのような利用をされているのか、引き続き調査を実施し、評価・検証を行っていききたい。

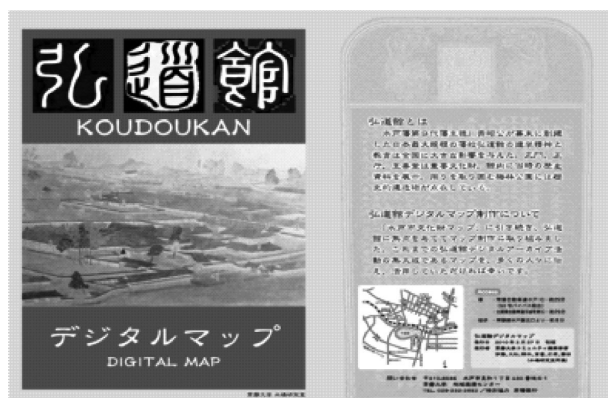


図2：弘道館デジタルマップ表紙

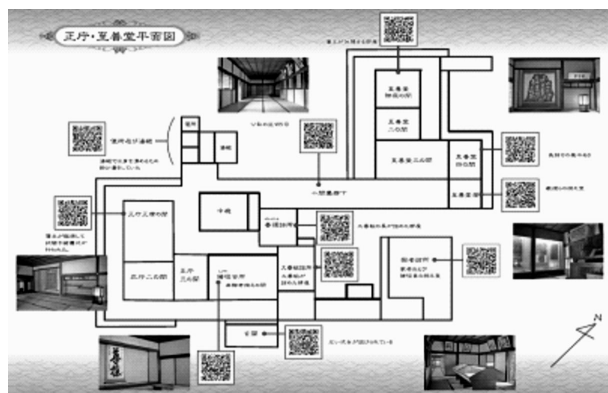


図3：弘道館デジタルマップ館内地図

ミュージアムにおける企業連携の可能性

山梨大学大学院博士課程

矢崎 陽子

1. はじめに

本研究の目的は、①企業の社会的貢献・CSR活動の一環としてのミュージアム支援の実態、②企業とミュージアムとの協働活動に関する情報の取り扱いの現状という2点について分析し、課題と展望を導き出すことである。

2. 企業によるミュージアム支援の実態

(1) メセナ活動とCSRの関連

社団法人企業メセナ協議会（以下、メセナ協議会）は毎年実施している「メセナ活動実態調査」においてメセナ活動とCSRとの関連について調査しており、2003年度の調査と比較して2007年度では、「メセナ活動をCSRの一環に位置づけている」と回答した企業は20ポイントも増加する結果となった。

本研究においても2008年度に同様の質問項目について調査を実施したところ、回答を得られた企業の内約9割において芸術文化への支援がCSRの一環と捉えられていることが明らかになった。しかしCSRへの関心が高まりメセナ活動がその一環であることが認められながらも、メセナ活動を行う企業の割合は全体の約1割程度を推移していると指摘されている。昨今のような経済状況においては、この割合が増加すること（または維持することさえも）は難しいとも考えられるが、有効な支援が続けられるためにその在り方について考える必要があるといえよう。

(2) メセナ活動の方法

メセナ協議会の「メセナレポート2009」によると、メセナ活動の方法として「資金支援」が約8割近くと非常に多いことが示されている。本研究では企業がどのような方法でミュージアムに対する支援を行いたいと考えているのか、またミュージアム側はどのような支援を期待しているのかについて検討したいと思い、アンケート調査を行った。

企業に対する調査はメセナ協議会のホームページ「メセナビ掲載企業」に掲載された529社を対象に行い、76社から回答を得た。回収率は約14%である。ミュージアムに対する調査はメールアドレスを公開

している美術館430館に依頼し、94館から回答を得た。回収率は約22%である。

(3) 企業が行いたい支援

今回の調査対象となった企業は比較的メセナ活動に関心が高いと推測されるが、このうちメセナ活動を行っている企業は約8割、ミュージアムへの支援を行っている企業は約5割であり、支援先の展示内容は企業に関わる内容である場合が6割以上であった。

図1で示したように、企業がミュージアムに対して行いたい支援として最も関心が高いのは「①継続的な経済的支援」、次いで「⑤本業における特性・強みを活かしたノウハウの提供による支援」、「②短期的・単発的な経済的支援」という結果となった。企業が果たしたい役割は様々ではあるが、①と②を合わせると5割以上に上ることから、経済的な支援に注力したいと考えていると看取される。また⑤を選んだ企業も多いことから自社の本業に関連する分野への支援に関心があることも指摘できる。

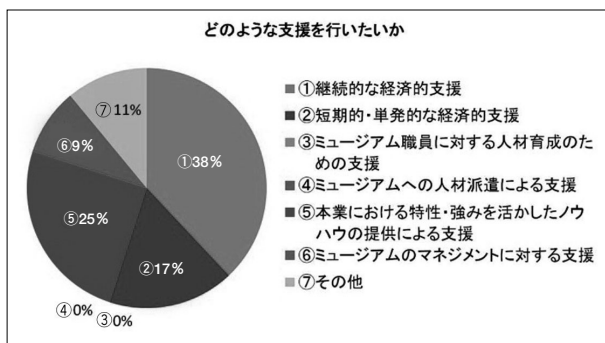


図1 企業が行いたい支援

(4) ミュージアムが重要と捉える支援

一方、図2で示したように、ミュージアムがこれまで実際に受けてきた支援の中で最も重要度が高いと評価したのは「②短期的・単発的な経済的支援」で62%を占め、次点の「①継続的な経済的支援」の

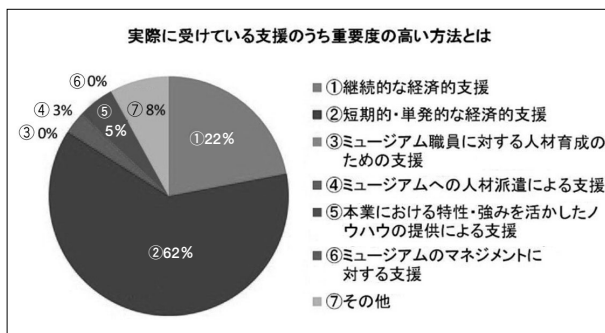


図2 実際に受けている支援のうち重要度が高い支援

22%と合わせると約8割にも上ることから、実際に受けている支援の中で経済的支援が重要視されていることが分かる。

(5) ミュージアムが期待する支援

次に、ミュージアムが企業から支援を受けたいと期待する支援について調べてみたところ、図3で示したように、最も関心が高い支援として選ばれたのは「①継続的な経済的支援」で54%、次いで「②短期的・単発的な経済的支援」が32%という結果となった。実際に受けている支援と比較すると、経済的支援への関心が高いことには変わりはないが、「短期的・単発的」よりは「継続的」な支援に期待が高く、このことから長期的な視点での支援が求められていると考えられる。

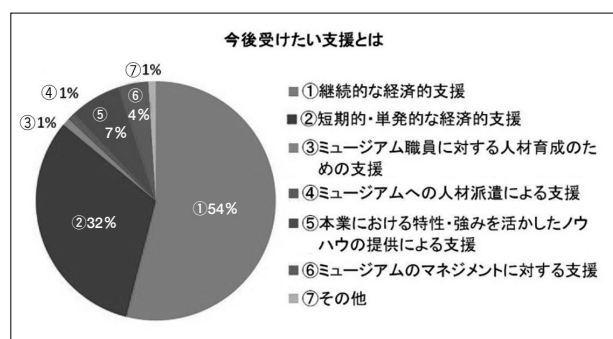


図3 今後最も受けたいと思う支援

(6) 企業によるミュージアム支援の障壁

しかしながら経済不況と呼ばれる現在、経済的側面に重点をおいた支援には限界がないのであろうか。ミュージアム支援の障壁について企業に対して自由回答形式で調査をしたところ、最も多い回答は「資金面の不足」に関するものであり、回答企業38社中18社がこの問題を挙げた。その他に挙げられた結果も総合すると、企業は「支援活動には資金力・資金的余裕が不可欠である」、また「ステークホルダーへの説明のためには効果の把握や本業との関連が必要である」と考えているのではないかと推測される。

そこで今一度ミュージアムが今後企業から受けたいと考える支援について検討してみた。この設問では①から⑦までの支援の中から、支援を受けたい順に回答してもらうという方法で調査を行っており、図4で示したように、ここでは関心度の高い順に上位3つまでの回答を集計してみた（図3は上位1つのみを集計した結果を表している）。

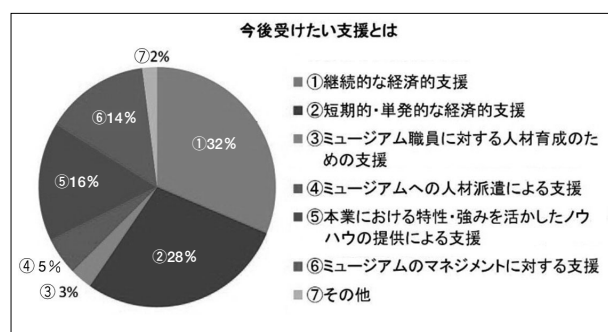


図4 今後受けたいと思う支援
（上位3つの支援の集計）

最も受けたい支援（図3）と比較してみると、経済的支援の割合が減り、「③ミュージアムの職員に対する人材育成のための支援」、「④企業からミュージアムへの人材派遣による支援」、「⑤企業の本業における特性・強みを活かしたノウハウの提供による支援」、「⑥ミュージアムの運営・管理面に対する支援」について、僅かではあるが回答割合が増加しており、このことから、今後これらの支援方法においても期待できるのではないかと考えられる。

企業によるメセナ活動というと経済的側面に注目が集まりがちであるが、それ以外にどのような支援ができるのか、それぞれの企業の強みを活かした支援が期待され、そのためにも、企業とミュージアムは互いに、またそれぞれのステークホルダーに対しニーズを適切に伝えるコミュニケーションの機会をつくっていくことが求められるだろう。

3. 協働活動に関する情報の在り方

(1) メセナ活動の目的

そもそも企業は何を目的としてメセナ活動を行うのであろうか。メセナ協議会の調査によると「社会貢献の一環として」という回答が最も多く、「地域社会の芸術文化振興のため」との理由が続いている。近年では特に「地域」を重視して活動を行っていることが指摘されている。

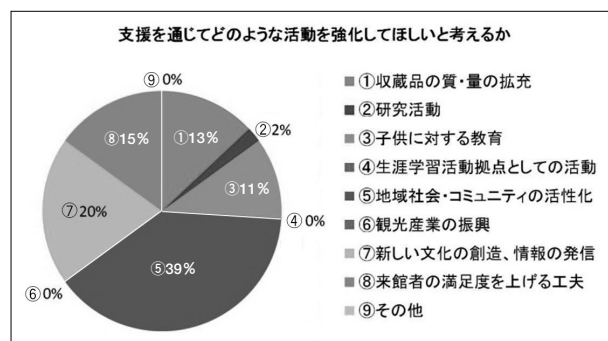


図5 ミュージアムに強化して欲しい活動

本研究の企業に対する調査においては、企業が支援することによってミュージアムにどのような活動を強化して欲しいと期待しているかという質問を設けたが、ここでは図5で示したように、「⑤地域社会・コミュニティの活性化」が39%と最も多い結果となった。

地域社会・コミュニティの活性化のためには、そこに住む人々とのコミュニケーションが不可欠だが、企業およびミュージアムはその協働活動についてどのように情報提供・コミュニケーションを行っているのだろうか。

(2) 情報開示・コミュニケーション方法の現状

本研究の調査においてCSRの一環として企業がミュージアム支援を行う場合、その活動についてステークホルダーに対して情報開示すべきと考える企業の割合は9割近くに達した。しかしながら実際に情報開示している企業の割合は約5割に減少する。

また、先行調査のひとつとして、社団法人日本経済団体連合会社会貢献推進委員会・1%クラブによる調査では、CSR活動に関する情報開示方法について分析されており、外部に向けての情報発信の方法として「ホームページ」や「CSR報告書」を利用している割合が多いことが示されている。本研究においてはミュージアムに対するメセナ活動に限っての質問を設け、16社からしか回答を得られなかったが、その内10社が「CSR等報告書」、7社が「ホームページ」という方法を挙げた。

4. おわりに

紙面の都合上今回詳細を述べることはできないが、本研究で行った消費者に対する企業とミュージアムとの協働に関する捉え方に関する調査において、一般に消費者は協働に関する情報に関心が低いという結果が示された。消費者は「地域」の重要な構成員であるが、関心が低い消費者に対し、「CSR報告書」や「ホームページ」は有効なコミュニケーション方法であろうか。

メセナ活動というと経済的な支援が中心であるというイメージが先行し、多くの障壁を生んでいるように見受けられるが、関係者間に存在するコミュニケーション・ギャップを埋め、中・長期的な視点で協働の在り方を模索することが最初の一步となるのではなかろうか。

参考資料

社団法人企業メセナ協議会「メセナ活動実態調査」
社団法人日本経済団体連合会社会貢献推進委員会・1%クラブ「社会貢献活動実績調査」

【謝辞】

本研究における調査は財団法人吉田秀雄記念事業財団の平成20年度研究助成を受けて行うことができたものである。同財団及び関係者の皆様、また調査協力者の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

防災教育支援推進事業「噴火の記憶データベース」プロジェクト

—博物館・小学校（行政）・研究者の連携—

阿蘇火山博物館

吉川美由紀・池辺伸一郎

須藤 靖明・溝口 千花

京都大学大学院 鍵山 恒臣

阿蘇市教育委員会 宮本 利邦

南阿蘇村教育委員会 山村 隆文

【はじめに】

「噴火の記憶データベース」プロジェクトは、阿蘇火山博物館、京都大学火山研究センター、阿蘇市教育委員会、南阿蘇村教育委員会らでプロジェクトチームを結成し、2009年4月より2年間の計画で活動実施している。本プロジェクトは、阿蘇火山博物館と地域の学校との連携活動に地域・研究者を巻き込み、「噴火の記憶データベース」の作成していくことで、研究者—博物館—学校—地域—自治体（教育委員会）の連携強化および市民の博物館・火山学リテラシーを向上させることを主な目的としている。

【阿蘇火山博物館の取り組み】

20世紀初頭から1990年代までの阿蘇山は、噴火による死傷者がわが国で最も多い火山の一つであった。阿蘇火山博物館は、火山防災の観点からも、阿蘇地域で継続的に火山学および火山防災啓蒙活動に取り組む組織の一つである。現在実施している事業には、京都大学や熊本大学などの研究機関、NPO法人阿蘇ミュージアムの協力を得ながら、地域の小学校との博学連携事業「めざせ一流！われら阿蘇の研究者」、



子どもたちの授業風景



図1 開発中の教材：データベース・収集・閲覧ソフト(web)のフロントページ

熊本県民を対象とした「火山と環境シンポジウム」、修学旅行生等学校団体を対象とした「火山体験活動(トレッキング)」などがある。

【プロジェクトの内容】

阿蘇火山博物館の取組みのうち、本プロジェクトの前身「めざせ一流！われら阿蘇の研究者」のノウハウから、啓蒙活動を実施する場合、「研究者主導の教材」による教育よりも「児童の調べ学習」を起爆剤とした活動のほうが、市民のリテラシー形成に有効だと我々は理解している。すなわち、学校が地域学習を行う際に、市民・博物館・研究者を情報収集源とすることで、地域にそれらのつながりが生まれ、

知の共有、すなわちリテラシーが形成される。

プロジェクトの構成は、次のとおりである。まず、小学生による ①「地域に残る噴火経験の掘り起こし・調べ学習の実践」を起点とした「災害記憶(記録)のデータベース化(教材作成)」を計画の軸と位置づけた。児童が調べ学習を進めていくと、疑似科学(エセ科学)に遭遇する場合がある。そのフィルター機能が果たせるのは教員であるため、②「教員研修カリキュラム」で正しい知識を持つ指導者・教員を育成する。また、児童による学習活動は、総合学習や理科、社会の授業でも活用できる学習指導計画および指導案としても記録し、社会に提案できる ③「教育モデル」を作成する。

【プロジェクト構成機関とその役割】

◎阿蘇火山博物館 プロジェクトの中心。①～③各活動のプランニング。協力学校と連携し学習活動を進める。また、学校と研究者との橋渡し役。学習発表会にもなる「火山と環境シンポジウム」の実施。

◎学校 やはりプロジェクトの中心。阿蘇火山博物館と連携し学習活動を進める。2009年度の連携校は、○南阿蘇村立立野小学校(4・5・6年生、総合学習、学習テーマ、「湯の谷大変(江戸時代に発生した湯の谷地区(温泉地)の水蒸気爆発について)」、2009年7月～2010年1月にかけて週1～2回の授業)、○阿蘇市立宮地小学校(6年生、総合学習、「最近の阿蘇の噴火災害と防災」2009年12月～2010年1月にかけて週2～3回の授業)、○南阿蘇村立長陽西部小学校(6年生、理科、「土地のつくりと変化」のうち火山に関する時間(南阿蘇村に特化))の3校。各校、阿蘇火山博物館と学習活動の事前に打ち合わせを行い、阿蘇火山博物館学芸員・研究者・気象庁などゲストティーチャーによる授業、地域住民へのインタビュー調査、現地調査、インターネットを活用した調べ学習などを盛り込んだ各学校オリジナルの学習プログラムを計画・実践。児童による学習の成果は、各学校での発表の他、「火山と環境シンポジウム」に於いても発表。

◎阿蘇市教育委員会・南阿蘇村教育委員会 学校・教員・市民への情報発信。具体的には、プロジェクト参加協力校の募集、教員研修プログラム・シンポジウムの広報など。また、教員研修プログラムの参加者取りまとめ。教員勉強会の実施など。

◎京都大学火山研究センター(研究機関) 最新の研



教員研修（座学）火口湖温度の観測値を解析



火山と環境シンポジウム 発表会



教員研修（野学）火口観察会・地震計の使用法解説



火山と環境シンポジウム 子どもたちの様子

究成果など阿蘇火山博物館への情報提供。また、研究者の派遣。例えば、学習活動におけるゲストティーチャーの派遣、教員研修プログラム時の講師（ゲストティーチャー・講師は、気象庁・熊本大・東工大・Cemiなどにも依頼）。特別観測施設の公開。「火山と環境シンポジウム」での協力、など。

【成果とまとめ】

「めざせ一流！われら阿蘇の研究者」事業を長期間継続させていることもあり、博物館と学校（教員）の連携は、年々強化されている。今年度に関しては、立野小、阿蘇市立波野小と連携することがほぼ確定している。また、プロジェクト立ち上げ以来、月1回の会議やメール等を用いた情報交換を行っていることで、教育委員会や京大とのつながりも一層強まった。例えば教育委員会については、学芸員が教職員の会議に出席する機会が増えている。研究機関に関しては、以前に比べ情報交換する頻度が高くな

り、その他の人的サポートも得やすくなった。さらには、講師や総合学習のプランナーとしての学芸員の活用が学校に根付きつつあることから博物館リテラシーは向上していると感じられ、また火山学リテラシーの向上に関しては、シンポジウムで発表したり、講演のメモをとり、研究者を相手に堂々と質問をする児童たちの態度を見れば一目瞭然である。

本プロジェクトの実施により、組織間の連携は強まりつつある。また、学校も博物館の利用に関心を抱きはじめている。こうした良い流れを維持、そしてさらに大きくするために、我々は活動を継続させるつもりである（本活動は、今年度も継続実施しています）。

※ 本事業は文部科学省による「防災教育支援推進委託事業」です。

論考・提言・実践報告

一枚のクイズカードから広がる 博物館の普及教育

NPO法人大阪自然史センター

五月女草子

大阪市立自然史博物館

釋 知恵子・佐久間大輔

1. はじめに

大阪市立自然史博物館では、一枚のカードを手に展示を見ている子どもたちの姿が見られる。そのカードは「たんけんクイズ」とよばれるカードだ。大阪市立自然史博物館には、展示解説員のような常に展示室に立つスタッフはいないが、このカードが展示と子どもたちをつなぐ掛け橋になっている。「たんけんクイズ」には、展示に関するクイズが5問載っている。クイズの答え方は、あらかじめ印刷された3つの答えから正解だと思うものを一つ選んで削り取るスクラッチ式。正解かどうかは○か×で示され、5問のうち4問以上正解であれば、ゴールで景品が

もらえるという流れだ。「たんけんクイズ」は、「クイズ」「スクラッチ」そして「シンプル」というところが子どもたちに受け、気軽にできる人気の高いプログラムとなっている。

ここでは「たんけんクイズ」を実施・改良してきた取り組みの過程と、それによって展示と子どもたちがどのようにつながったか、どんなことが達成されたのかを、子どもたちの実際の反応と共に報告する。

2. 「たんけんクイズ」の誕生と目的及び問題点

「たんけんクイズ」は、1996年ごろ誕生した。大阪市では、1995年度から学校週5日制に合わせて、小中学生の博物館施設などの入館料が無料となり、翌年、「無料開放の拡充・充実活性化」事業が予算化された。「たんけんクイズ」はこの事業の一部として、小中学生対象に作成された（樽野・中原，2009）。その目的は、①展示を見て答えるクイズにより、展示をよく見てほしい、②何種類かの問題を提供することで、何度も来てもらえるきっかけにしたいということである。ともすれば恐竜だけを見て満足しがちな低学年層に、すべての展示室を回ってもらい、また着目されにくい小さな展示物にも目を向けさせる、という意図をもって、問題を作成した。この意味において、「たんけんクイズ」は旧来の「セル



図1：たんけんクイズカード（裏・表）スクラッチ式のクイズカード（2010年現在使用中のもの）

フガイド」にスクラッチというゲーム要素を加味したものとスタートした。

いくつかのクイズのバージョンを作り試行錯誤した後、2003年から2004年にかけて、博物館と大阪自然史センターで行った科学系博物館教育機能活用事業の一環として、クイズ改良のための抜本的な見直しを図った。ポイントは、難しい漢字にはふりがなをふる、解説文を読ませるのではなく、なるべく展示そのものを観察することによって答えられるものにする事だ。これらの結果、当初の問題では大人の助けなしには取り組みにくかった小学校低学年にも、わかりやすいものになった(図1)。この改良の経過は樽野・中原(2009)に詳述されている。

しかし、改良後であっても、他のところには目もくれず、一目散にクイズのある場所に走っていく子どもたちの様子が見られた。クイズをしたいという焦りから、クイズ以外の展示物が無視されてしまうことがあるのだ。また、博物館リピーターの中には、展示を見ずに、答えを覚えてしまっている子どもたちもあり、展示室に行かずに答えを削っている様子も見られた。

「展示をよく見る」「何度も来るきっかけ作り」という、このクイズのねらいを達成するため、2004年度から、博物館学芸員とNPO 法人大阪自然史センターの教育スタッフの協力の下、子どもたちへのアンケートや、子どもたちの様子を見ることによりさらなる改良を行なった。アンケートは、参加者の年齢やリピーター率を知るために行った。そのほかに「はくぶつかんで みつけた いちばん すきなものを おしえて!」という質問を入れ、自由に描けるスペースも設けた。

その結果、(表1) 低学年の参加数が高学年よりも多いこと、高学年ではほとんどがクイズのリピーターであることがわかった。アンケートの結果、大きな収穫だったのは自由記述の質問に対して、単純に展示物の名前を書くだけでなく、「アロサウルスはあんがいちいさかった」「ヘラジカのまんまるいお目目」(子どもの文章まま) など、何のどこが好きと詳

しく書いたり、絵を描いたりしているものが多く見られ、子ども達の展示室での発見を知ることができた。このことにより、アンケートの結果以上に、子どもたちの展示への視線を知ることができ、「たんけんクイズ」の改良への大きな糸口になった。

3. 「たんけんクイズ」に「チャレンジ」をプラスする

「たんけんクイズ」に内在する大きな課題は、クイズの問題に対して答えは一つしかない、という点だ。子どもたちに知識を確認することはできても想像力を膨らますことができない。定型のクイズである限り、リピーターを刺激し続けることは難しいし、暗記して答える子どもはふえてしまうだろう。これに対して、正解不正解ということにとらわれず、子どもたちそれぞれの答えを見つけてもらうような問いかけができないか。その問いかけが、一つの展示物でなく、博物館全体を見てもらうものになっていれば、クイズ以外の展示も見てもらえるのではないか。アンケートの絵や、言葉は十分それに対応してくれそうな子どもたちの反応を示していた。

クイズでは、すぐ答えを覚えてしまうリピーターの子どもたちも、定期的に変わる自由記述の「発想の呼び水」をつけることで、新たな視点から展示物を見てくれるのではないか。2004年度後半から、さっそく「たんけんクイズ」にプラスして、一つのテーマを印刷した白紙を渡すようにした。この白紙にテーマにそって自由に絵や文字を描いてもらうのである(図2)。この活動を「今日のチャレンジ」と呼んだ。

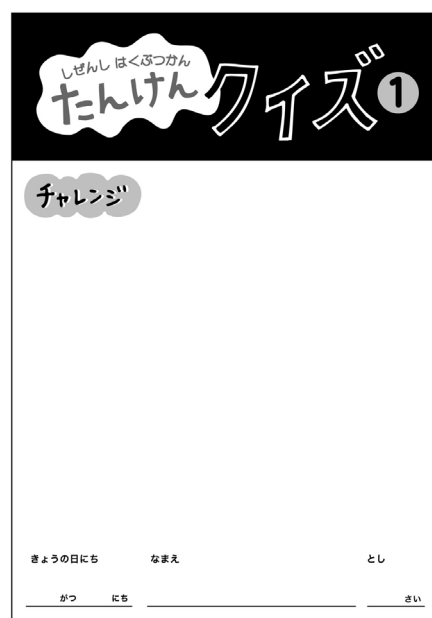


図2：チャレンジカード(2010年現在使用中のもの)

表1 「たんけんクイズ」の参加者に占めるリピーターの割合

実施日	低学年		高学年	
	参加者数 (リピーター数)	リピーター率	参加者数 (リピーター数)	リピーター率
2005年3月5日	62(40)	64.5%	34(31)	91.1%
2005年3月6日	116(54)	46.5%	51(44)	86.3%
合計	178(94)	52.8%	85(75)	88.2%

さらに、教育スタッフがクイズのルール説明や発想の引き出し役を展示室入り口でファシリテーターとなって子どもたちに伝える試みをはじめた(図3)。



図3：たんけんクイズのスタート風景

4. 現在の「たんけんクイズ」の状況

上述のような経過で改良した「たんけんクイズ」の現在の実施方法を以下に示す。

- ・実施日：「たんけんクイズ」スタッフ（基本1名）によって、日曜祝日に実施。夏休みなど来館者が多い期間は土曜日でも実施する。
- ・実施時間：10時半ごろから閉館1時間前ぐらいまで。30分ごとにスタートする。
- ・実施場所：大阪市立自然史博物館の本館入ってすぐのナウマンゾウの近くで移動式看板を立て、スタッフが導入を行う。
- ・導入方法：5分程度のお話の中で、「たんけんクイズ」の遊び方と「チャレンジ」の説明をする。説明には、何枚かの手持ちパネルを利用して、スタッフが見つけたチャレンジテーマの展示物（例えば、私のきれいなものナンバー1は、モルフォチョウなど）を紹介して、何をすればいいのかを具体的に见せる。

- ・チャレンジテーマ：月1回チャレンジのテーマを変える。今まで行ったテーマは、「きれいなものナンバー1を見つけよう」「育ててみたいものはなに?」「びっくりどっきりこわいもの探し」「お気に入りのホネをおしえて」「かくれんぼ名人をさがせ!」「こんな恐竜いないかな? 想像してかいてみよう」など。
- ・「たんけんクイズ」の子どもたちの動き：説明を聞いた子どもたちは自由にクイズに取り組みながら、自分でゴールを目指す。絵を描いた子どもは、家に持って帰るか、博物館に置いて帰るか選ぶことができ、博物館に置いて帰ることを選んだ子どもはゴールにある「たんけんクイズ」のポストに入れる。
- ・集めたチャレンジの絵について：館内で掲示をする。場所に限りがありすべての絵の掲示はできないので、綴ったものも配置し、自由に閲覧できるようにしている。

ここでは、チャレンジに参加してくれた子どもたちの数を(表2)に示す。

単純に各年度の参加者数合計だけを見ると、2006年度以降減少傾向がみられる。しかし、参加者数の減少は1) 事業実施への投資資源の減少と、2) 特別展などのイベントやインフルエンザなどによる母数となる中学生以下の来館者数の減少の2つからほぼ説明できる。1) 投資資源量の減少が参加者の減少につながるのは、今日のチャレンジを行う経費を外部の助成金などに依存しているために、助成金の減少により開催日数や一日の実施回数などが大きく影響をうけるためだ。さらに、プログラムの発展に伴ってスタッフの準備や開催後の処理が煩雑になったため、2008年度途中からは一日の開催回数を10回から8回へと減少させている。これらを考慮して、チャレンジの導入1回あたりの参加者数(C/B)を

表2 「今日のチャレンジ」参加者の推移

実施日	A:プログラム 実施日数 (日)	B:チャレンジ 導入の説明回 数(回)	C:チャレンジ 参加者合計 (人)	C/A: 日当 り参加者数 (人/日)	C/B: 導入 回あたりの 人数(人/回)	D:実施日の中 学生以下の 来館者数(人)	C/D:プロ グラム参 加率	E:チャレン ジの回答数	E/C:ゴー ル到達率
2005年7月～2006年3月	62	598	7949	128	13	17670	45.0%	4875	61.3%
2006年4月～2007年3月	106	903	13995	132	15	34650	40.4%	8980	64.2%
2007年4月～2008年3月	70	467	11085	158	24	33118	33.5%	7158	64.6%
2008年4月～2009年3月	67	534	6514	97	12	21556	30.2%	3987	61.2%
2009年4月～2010年3月	60	483	5206	86	11	21602	24.1%	3129	60.1%
合計または平均	305	2502	39543	120	16	106994	37.0%	25000	63.2%

検討すると、恐竜展などにより中学生以下の来館が増えた2007年度が突出して高い他はそれほど変化していないことがわかる。

日当たりのプログラムの実施回数の減少により、当初50%近かった当日の中学生以下来場者に占める探検クイズ参加者の率（C/D）は24%台にまで落ち込んでいる。しかし、主催者側としては中学生以下来場者にならず参加してもらうべきプログラムではなく、多様な博物館の楽しみ方の一つという位置づけをしているため、むしろ探検クイズが内容をわかった上で参加が判断される状況となった、定着した選択肢となっていると受け止めている。

2）特別展の人気による参加人数の変動はやむを得ないものとも考えている。2009年は特別展よりも新型インフルエンザの影響を被っている。

私たちは参加者の実数（C）よりも、参加した子どもの数に占めるゴール到達者の割合（E/C）を重視している。ゴール到達率が低い場合には、館内の案内指示が十分でなかったとも考えている。ゴールまで、絵を描いて持ってきてくれた子どもの割合は、プログラムに満足してくれた声無き参加者の意思表示と捕らえ、この比率を最も重視している。幸いにしてこの値はほぼ一定で推移している。これらをふまえ、次項で子どもの様子を中心に報告する。

5. 子ども達にとっての「たんけんクイズ」 （クイズについて）

はじめて参加する子どもたち

博物館に初めて来館した子は、スタッフの案内や館内の看板、すでにクイズに参加している他の子どもたちの様子からその存在を知る。「クイズ」という言葉が好奇心をそそり、なんとなくおもしろそうだからやってみようとする参加の子が多い。時に一緒に来た家族から勧められて参加する子もいる。無料公開の展示ゾーンがゴールとなっているために、有料の常設展示へ足を向けるきっかけになる場合にもある。

博物館にはじめて足を踏み入れた来館者は、ここがどんなところなのか、どのくらいの広さなのか、何をみたらいいのかなどが分からずに、とまどってしまうことがある。その点でこのクイズがガイド役となり、来館者のスムーズな見学を助けている。本来のセルフガイドとしての機能といえる。

リピーターの子どもたち

クイズの存在を既に知っているリピーターの子どもたちは、スタッフに自ら声をかけて参加している。彼らにとって「たんけんクイズ」は気軽に参加でき

る博物館のイベントとなっているようだ。また、今までやったクイズのカードと景品としてもらった展示物の写真絵ハガキを、ファイルに入れて大切に持ち歩く子もいる。回数を重ねるごとに手元に残るカードが喜ばれている。

初めて参加する子ども、リピーターともに共通して多く見られるのが、一緒に来た友人や家族と会話しながらクイズを進めていくことだ。クイズの答えを一緒に考えたり、正解を喜びあったりする姿が見られる。時に、別々で来館した子どもたちがクイズをきっかけに仲良くなり、館内を一緒にまわる姿もある。また、当初クイズの問題以外の展示は見ないという懸念もあったが、問題から次の問題へ行く間や、答えのある展示に近い別の展示も「こんなのあったんやー」といいながら注目している。こうした姿から「たんけんクイズ」は展示に注目してもらうだけでなく、一緒に来た人との会話を盛り上げるツールとなっている（図4）。



図4：クイズをしている様子

（チャレンジについて）

スタッフとの関わりで見えてきた子どもたちの姿

「チャレンジ」は、スタッフが参加者にその日のテーマとやり方、そして作品の例を紹介してスタートする。作品例の紹介は、具体的にどんな活動をすればいいかを視覚で理解してもらうために行なっているが、ときどき作品例とまったく同じ絵を描く子がいることがある。単に真似をして描いている場合もあるが、その展示物を探している様子が見られることもあった。作品例を紹介することで、子ども達の自発的な発見を誘導し限定してしまう懸念もあるが、一方でクイズ以外の展示に注目してもらえるきっかけにもなっていることが分かった（図5）。

また、時にスタッフは、ゴール地点で子どもたち



図5：チャレンジに絵を描く子ども



図7：館内掲示の様子



図6：ゴールでの対応の様子

を待ち受けクイズの答え合わせをし、チャレンジの作品について共有する時間を持つ（図6）。どうしてこの絵や文字を書いたか、どんなことを思ったかをはじめ、気になったことや日常生活とのかかわりなどについて話をし、博物館で過ごしたその子自身の体験を深めるためである。この場が作品をみただけでは分からない子どもの考えや意図を知る貴重な場になっている。例えば、作品に描かれた絵はひとつ

でも、話しているうちにその子が何を見てきたか、何を見たくて来館したかなどを語ることもあった。

ゴールで集めた作品は館内に掲示し、次回来館した子どもたちやその家族に見てもらうことを期待している（図7）。多くの子が「自分の作品が博物館に飾られる」ということで、誇らしげに、時に恥ずかしそうに作品を館に置いていくが、中には「上手に描けたので持って帰る」という子もいる。どちらの場合も、参加した子どもが自分の発見を自分自身で大切に感じている効果が出ているように思う。

作品から見える子ども達の姿

以上のようにして描かれた作品を紹介しながら、子どもたちの姿を紹介する。

（表3-1）このテーマでは自分がおもしろいと思った歯の絵と一緒に、〇〇の形に似ていると文章で書いてくれる子が多かった。その中で恐竜ディプロドクスに注目した子は「ソーセージのようなかたちをしていておもしろい」と表現していた。図鑑などでは「えんぴつのような」と表されることが多いこの歯だが、自分の目で見たことを自分の知識とつなげて表現していた。こうした活動が、子どもたちに

表3-1 テーマと子どもの作品の関連性

テーマ	ねらい	子どもたちの作品
おもしろいかたちの歯は？ (2009年8月)	館内にある骨格標本に注目。動物によって歯の形の違いや食性の違いに気付いてもらう	・ ナウマンゾウの歯の模様を細かくスケッチ、クロワッサンのような歯と表現 ・ イノシシの歯、大きな牙に小さな歯がおもしろいと表現 ・ ティラノサウルスの歯、ナイフのような、一口で食べられそうな歯と表現 ・ わたしの歯、自分の歯を描いた子

表3-2 テーマと子どもの作品の関連性

テーマ	ねらい	子どもたちの作品
博物館でびっくり！ はじめて見たもの (2009年11月)	自分の経験と展示をつなげて 見てもらうこと	・ ナウマンゾウ、タカアシガニ、オオジャコなどの大きいもの ・ ディメトロドン、恐竜などの古生物の骨格標本 ・ 鉱物、昆虫など
博物館でもみーつけ！ 私の知ってるものあったよ (2009年12月)	自分の経験と展示をつなげて 見てもらうこと	・ モンシロチョウ、クワガタ、ダンゴムシなどの身近な昆虫類 ・ ナス、ぶどう、りんごなどの食べ物など

とって自分だけの特別な体験になっていた。

(表3-2) この2つのテーマに共通して見られたのが、既に知っていることプラス新たな発見や驚きがあった時にその展示の絵を描く子がいたことだ。例えば「博物館でびっくり！はじめて見たもの」のテーマでアンモナイトを描いた子は、それを学校で習い知っていたが、博物館で本物を見てびっくりし絵を描いたという。またヘビの体の骨を描いた子も同様の理由である。「博物館でもみーつけ！私の知ってるものあったよ」のテーマでは、サトイモは知っていたがその生り方を展示で初めて知り驚いたので描いた、と言う子がいた。参加者と展示がつながった証拠であり、さらに参加者の心が動き、自分の知識と展示に対しての新たな意味づけがされた瞬間である。そんな瞬間を表現したい気持ちが見えたテーマだった。

「チャレンジ」のテーマはうまくいったものばかりでなく、子どもたちにとって取り組みにくいものもあった。そのひとつが「博物館で春を見つけよう」というものだ。年齢の低い子は「春」という概念があいまいで、分かったとしてもそれを展示の中から探すのは難しかったようだ。このことから、子どもたちへのテーマ設定について改めて考えることができ、その後、参加する子どもたちに具体的にやってほしいこと、見つけてほしいことをテーマにするようにした。

6. 子ども達の声聞くツールとしての「たんけんクイズ」

では博物館にとって「たんけんクイズ」はどんな

意味があるだろう。探検クイズを通して、子どもたちがただ展示物を見るだけでなく、「博物館で何かをやりたい」と思っている姿が見えてきた。その証拠に、クイズの答えをすべて暗記している子やゴールでもらえる景品のカードを全種類持っている子まで、何度も「たんけんクイズ」に参加している。博物館にとって「たんけんクイズ」は、そういった「何かやりたい」子どもたちの気持ちをくみとり、実現できる場にもなっている。博物館が参加できる場であることの重要性を改めて感じる。

また、「たんけんクイズ」は、博物館の新しい情報発信や、いま開催している展覧会の宣伝のできる場にもなっている。例えば、リニューアルした展示室を紹介するため、その展示室で好きなものを見つけてもらうテーマを設定したり、特別展のテーマに合わせて、関連したトピックに注目するテーマを設定している。これをきっかけに展示室に足を運んでもらうことができ、実際に特別展開催時には「特別展を見てきた」という子が増えたり、特別展示室内で「チャレンジ」を行なう姿が見られた。またこれから開催される展示にちなんだテーマを設定することで、宣伝になり期待を盛り上げることができる。

もうひとつは、クイズを媒介にして子どもたちや来館者とコミュニケーションがはかれ、彼らの声を聞けることができることである。来館者は何を見たくてやって来るのか、どんな見方をするのか、知っているものは何か、どんな疑問が生まれたか、一緒に来た人とどんな会話をするのか。それは次回への改善ばかりでなく、展示作りや催し物など、新たな博物館活動に活かされる。いわば来館者の声を反映させた博物館活動ができるのである。この声を聞く

ためにスタッフは声のかけ方を工夫し、子どもたちの反応を見ながらトライ＆エラーを重ねている。

7. 今後の「たんけんクイズ」の展開とまとめ

クイズの問題自体を新しくしていく必要はあるものの、クイズというスタイルはリピーターの様子からみても受け入れられているようである。今後、発展させていく必要があるのは「チャレンジ」である。その理由を以下に挙げる。

スタッフ面の改善

現在、この事業は外部助成金を得ながら、非常勤の自然史センタースタッフを中心に行っている。このために必ずしも十分な人的体制がとれず、子どもとのコミュニケーションが充分にとれない日がある。この活動の大切なポイントはクイズの正解率や絵の出来ではなく、子どもたちが展示室で何を見て何を考えたのかをスタッフと子どもが一緒に振り返り、達成感を持って帰ってもらうことである。そのためにはスタッフとの関わりが重要である。展示室を楽しむ基本機能としてどのようなあり方がもっとも相応か、検討を重ねていきたい。

実施スタイルの見直し

現状の「チャレンジ」はテーマに沿った絵や文字を「書くこと」に限られており、苦手な子にはハードルの高いものとなっている。さまざまな子どもが来館し、さまざまなモノがある博物館だからこそ、多様な彼らの能力を発揮できる実施スタイルが必要であると感じている。

さらに展示に近づこう

今までスタッフは、「チャレンジ」のやり方を説明をし、子どもたちを展示室に送り出す役目をしてきたが、今後は展示室の中で彼らを迎え、展示を通してさらなるコミュニケーションをはかれるようにしていく予定である。90分程度のプログラムで展示を学ぶ子どもワークショップ、より大人向けの学芸員による講演プログラムや野外観察との連携や使い分けを意識しながら、知らずに来ても気軽に参加できるフットワークのよさを大事にしたい。活動を通して、展示に対する新たな目線を提供し、また博物館には気軽に質問したり感想を話せるスタッフとその場があることを印象づけたい。

博物館が来館者とコミュニケーションをとる手段として、セルフガイドは決して目新しい手段ではない。また対象となる展示もオーソドックスなものである。しかし、プログラムの改良とスタッフの介在によって、想像力を引き出すきっかけを与え、反応

を受け止めるといったコミュニケーションプログラムになる。より洗練させることで、ガイドツアーなど観点の固定化した一方的な手法に比べ、より来館者の自由度が高い手法ではないかと考えている。

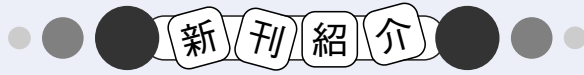
教育スタッフはこれまでも学校や子どもと博物館をつなぐ役割を担ってきた（釋，2010）。専門性を背景にさまざまな情報の供給源となる学芸員と連携することで、博物館と来館者との間に顔（＝専門性）の見える関係を築き、分厚い利用者コミュニティ層を育て発展させてきた（佐久間，2010）。今日のチャレンジなど展示室での活動により、教育スタッフや学芸員が子どもたちの声に今以上に耳を傾けそのメッセージを読みとるよう努力していきたい。彼らの疑問やニーズを将来の活動に還元し、今後のよりよい博物館づくりにつなげていけると信じている。

謝辞

今回の取り組みについては、特定非営利活動法人大阪自然史センターの教育スタッフが担当した。2004年から2006年にかけては文部科学省「子どもの居場所」事業の一環として「全国科学系博物館等地域子ども教室推進事業」の支援を受けてプログラムの改良を図り、また2007年から2009年にかけては大阪自然史センターによる事業として「子どもゆめ基金」の支援を受けて「今日のチャレンジ」活動を行うなど充実を図った。これらの支援をいただいた関係各方面に感謝したい。また、本稿及びプログラム全体は、今まで「たんけんクイズ」を担当した山下和子氏をはじめとする教育スタッフと、大阪市立自然史博物館の学芸員・職員・受付スタッフ・警備員・清掃要員など館内スタッフや、大学生のボランティアスタッフから多大なる助言や協力をいただいて発展してきている。ここであらためてお礼申し上げたい。

引用文献

- 佐久間大輔（2010）学芸員の顔（＝専門性）が見える博物館へ、ミュージアムデータ 76：10－14。
樽野博幸・中原まみ（2009）クイズでコミュニケーション。『自然史博物館』を変えていく。（大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター編 高陵社書店）63－73。
釋知恵子（2010）教育スタッフの仕事 来館者とともに育つ博物館を目指して、追手門学院大学博物館学芸員課程年報Musa（24）：53－58。



『新博物館学 これからの博物館経営』

小林 克著、同成社刊、2009年10月5日発行、224頁
ISBN978-4-88621-448-1 C3030 定価：2,800円＋税



現在、日本の博物館の経営は非常に難しい時代を迎えている。出口の見えない不況によって収入や予算が減少し、様々な制度改革によって博物館を支える制度が変更され、先の見えない不安な雇用の下で博物館の人間は無理に無理を重ねる状況が続く状態になっている。この状態が続けば人は疲弊し、本来の博物館業務も十分に行えなくなってくる。こういった状況が進む中で我々はどのようにこれからの博物館経営を考えていくべきだろうか。

今回紹介するこの本はその博物館経営に対して、学芸員の経験から得た様々な知見を通して、今後の博物館経営の方向性を示唆するものである。著者は江戸東京博物館に勤務された後、現在、東京都写真美術館に異動されている。正式な肩書は東京都歴史文化財団の学芸員。この財団は江戸東京博物館と東京都写真美術館（と東京都現代美術館）の指定管理者であり、指定管理者である財団による博物館経営という視点から見て本書の内容は興味深い。そして「博物館」と「美術館」という館種も違えば、「江戸」と「写真」という扱う資料も異なる館に勤められたからこそ書ける博物館経営の知恵が満載されている。

各章の構成は「博物館の現状と課題」「博物館を作る」「博物館を運営する」「博物館事業と自立的経営」「連携する」「これからの博物館―運営から経営へ」という6章から成る。各章とも非常にボリュームのある内容なので、なかなか

要約することは難しいが、著者が言いたいことは「博物館経営で最も重要な点はバランスである」ということ。このバランスを取らなければならないものには多くのものがあるだろうが、たとえば館の「専門性」と「収益性」のバランスについて挙げている。また博物館の基本的な事業はきっちり行う一方で、10年変わらないような常設展示を行うのではなく、飽きられない新たなサービスを付加していくことの必要性についても主張している。

読後の感想は個々の内容は学芸員経験のない私にとっても大変勉強になったが、本書は学芸員としての知見からの提言であって、研究書として博物館学、博物館経営の体系化したものというところまではまだ十分に深化しているとは言えないのではないだろうか。筆者には今後、より内容を深めていただいて、「研究」としての体系化を心より望みたい。そしてこの中で書かれていることを博物館経営、ミュージアム・マネジメントの研究の体系として研ぎ澄ましていくのは筆者だけでなく、ミュージアム・マネジメントの研究者たち、すなわち我々の仕事でもないか、とも思った。つまり、本書は我々に突きつけられた課題でもあるのだ。会員の皆様にもぜひ本書を読んでいただき、この内容を皆様の研究に取り入れていただいて、各自の「研究」としても深めていただくことを望みたい。

（桃山学院大学 井上 敏）

i n f o r m a t i o n

◆文献寄贈のお知らせ

・公益財団法人多摩市文化振興財団

『パルテノン多摩 歴史ミュージアム特別展 多摩のどうぶつ物語 ほ乳類が見た地域の歴史』

u o ! t e w i o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

相澤 竜次
梶原誠太郎

財団法人横浜市ふるさと歴史財団
本渡歴史民俗資料館

【学生会員】

都甲友理絵 東京大学大学院
(五十音順・敬称略)

日本ミュージアム・マネージメント学会法人会員 (2010年11月現在)

株式会社アートプリントジャパン
アクティオ株式会社
財団法人阿蘇火山博物館 久木文化財団
株式会社江ノ島マリンコーポレーション
財団法人科学技術広報財団 日本科学未来館 運営事業本部
カロラータ株式会社
交通科学博物館
財団法人竹中大工道具館
公益財団法人 多摩市文化振興財団
株式会社丹青研究所
株式会社丹青社
つくば科学万博記念財団
東京家政学院大学
東京家政大学文学部心理教育学科

株式会社トータルメディア開発研究所
内藤記念くすり博物館
長崎歴史文化博物館
株式会社西尾製作所
株式会社乃村工藝社
パナソニック電工株式会社 パナソニック電工汐留ミュージアム
株式会社文化環境研究所
株式会社文化総合研究所
ミュージアムパーク茨城県自然博物館
財団法人山梨県青少年協会 (山梨県立科学館)
UCCコーヒー博物館
早稲田システム開発株式会社

(五十音順・敬称略)

JMMA会報 No. 58 (Vol. 15 no. 3)

発行日 2010年11月30日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、津久井真美

e-mail: kanri@jmna-net.jp